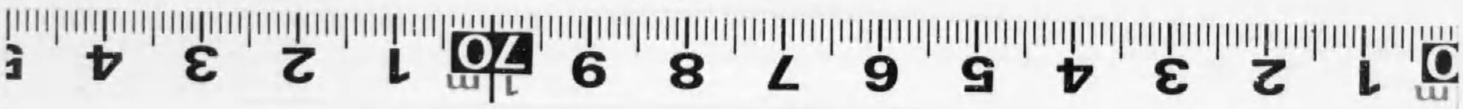
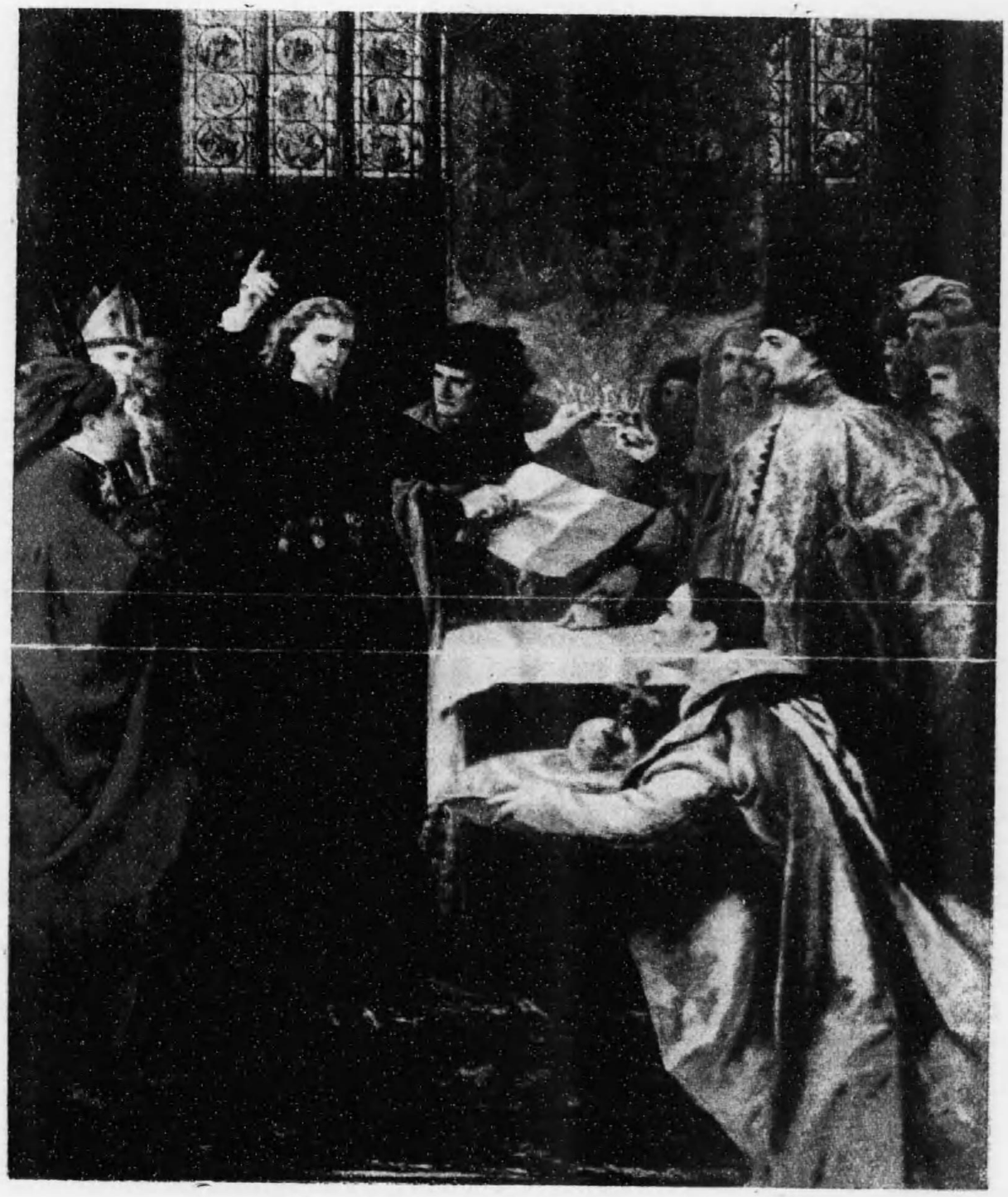
522
22
176



40



KING RICHARD II RESIGNING THE CROWN TO BOLINGBROKE

"King Richard II" Act IV. Scene 1

From the painting by Sir John Gilbert, R. A.
In the Walker Art Gallery Liverpool.

ソチャーズ一世

坪内逍遥譯

大正
15. 6. 25
内交

MR. OSCAR ASCHE AS BOLINGBROKE
In "King Richard II"

L. Caswall-Smith, Photo

Mr. F. R. Benson as King Richard II

L. Caswall-Smith, Photo

MISS LILY BRAYTON AS QUEEN TO RICHARD II
With Attendants, In "King Richard II"

L. Caswall-Smith, Photo

522-176
~~551-229~~

緒言

シェークスピヤの作に係る英國史劇は其三十七篇の中に七種ある。其うちで、彼れが作劇の第一期間に屬せしむべきものが二種、『ヘンリー六世』と『リチャード三世』とであり、其第二期に屬せしむべきものが此『リチャード二世』と『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』である。第一は、寧ろ舊脚本の改作又は補作といふべく、殊にそれは彼れが作者見習ひとして恐らく最初に手掛けたものであるらしく、嚴密には創作

と見做しがたいものであり、第二の『リチャード三世』は、今なほ時々上演されるほど、實演脚本として一種の人氣ある作ではあるが、且つ既に傑作拾九種の中に加へて譯しておいた程に有名でもあるのだが、是れも實は彼れの純粹の創作では無いといふ評のあるもの。それらに比べると、此『リチャード二世』は、第二期中の作ではあるが、而も決して傑作とは見做すべからざるものであるにも拘らず、若し沙翁の作三十七篇中より強ひて二十篇か十八九篇を選擇しようとする場合には、取落してはならぬものとせられるのが通例である。例へば、先年エール大學の

教授タッカー・ブルック、其他二教授が編著した"Shakespeare's Principal Plays"といふ選集は、都合二十種だけを集めたものだが、其うちにも此作は『眞夏の夜の夢』、『ロミオとジュリエット』、『ヴェニスの商人』、『ヘンリー四世』、第一部、第二部、『ヘンリー五世』、『空騒ぎ』、『お氣に召すまゝ』、『ジュリヤス・シーザー』、『ハムレット』、『オセロー』、『リヤ王』、『マクベス』、『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレーナス』、『シムベリン』、『冬の夜ばなし』、『テムペスト』と同列に收められてある。其中に『リチャード三世』の漏れてゐるのを見ても、此作の沙翁學者間に重んぜられてゐることが察せられるであらう。又昨年出來た「シェークスピヤ入門」とも

譯すべきレーモンド・アルデンの"A Shakespeare Handbook."の如きも、彼れが作の代表として十八篇だけを選り出してゐるが、其中にも此作は入れてある。さうして私が既譯傑作集中に入れておいた『以尺報尺』(メジュア・フォア・メジュア)や『じゃ〳〵馬ならし』や『シムベリン』や『リチャード三世』は脱けてゐる。蓋し此作は實演脚本としては決して人氣を博し得なかつた作なのではあるが、讀んで味ふものとしては、等閑視すべからざる多少の特色があるのである。現に詩人コールリッヂの如きは、之れを以てシェークスピヤの英國史劇中の白眉であるやうにさへ褒めた。勿論、それは溢美の評だが、種々の關係上、

注意すべき作であることは爭はれない。

此作が四つ折本に印刷されて世に出たのは一五九七年が最初で、其際には、まだ作者の名は附記されてなかつた。書の表題は『リチャード二世王の悲劇、ロオド・チャムバレイン閣下の御家來衆が公演せられしをそのまゝ』であつた。第二の出版も四つ折本で、それは一五九八年で、それには題扉に By William Shake-speare と作者の名が書き加へられてあつた。第三のもやッぱり四つ折本で、一六〇八年の刊行。それには下の如き書き添へがあつた。『議院の場幷びにリチャード王廢黜の場を、最近地球座(グローブ・シヤター)に於て、王陛下の

御家來衆が上演せられしをそのまゝに附け加へたり。』

此第三の四つ折本は一六一五年に再版されたが、それを當時の實演用の臺本と照らし合せて訂正を施したのが、多分、例の一六二三年の第一フォリオ卽ち二つ折本全集の底本であつたらうといふのが沙翁學者間の輿論である。議院の場幷びに廢黜の場は、筋立の上から見ても、第四幕の短か過ぎるのから推測しても——此場がなくては、餘りにあつけない一幕である——初めから書き込んであつたものらしく、後になつて遽かに書き足したものとは思はれない。按ふに、第一版と第二版とに此場がない

のは、時の政治上に忌諱があつたので、女王エリザベスの思はくを憚つて、刪除を餘儀なくされたのに相違ない。それは、時のローマ法王が、女王が新敎信者であるのを憤つて、一五九六年に、イギリス國民に向つて公然叛逆を勸告する諭令を下した事實や、女王自身其境遇をリチャード二世に比して常に廢黜を危惧してゐたといふ事や、一六〇一年に叛臣エセックス伯の友、士爵(サー)ジリー・メイリックといふ者が民心煽動の目的で『リチャード王の廢黜』と外題した劇を上演せしめたといふ事なぞから推測して、有り得べき事と論定される。

出版の順序は右の如くであるが、書かれたのは一五九三年から同九四年までの間であつたらしい。すなはち、『ヘンリー六世』や『リチャード三世』よりは少しく後、『ジョン王』よりは聊か前に書かれたものであらう。之れに關しては、殆んど同じ頃(一五九五年)にダニエルといふ一詩人が此作に摸して若しくは此作からヒントを得て書いたらしい『内亂物語』といふ一詩篇が出版されてゐるといふ事幷びに此作には、作者が其頃師事してゐたマーローの作『エドワード二世』――一五九〇年から一五九三年までの間の作――の感化影響が著しいといふ事なぞが多少その證據となる

のみならず、別に種々の内的證據がある。例へば、其内容の五分の一が押韻してあること、殘り四分を占めた其沒韻句がまだ大分未熟で、大抵、各行末で讀み切るやうになつてゐること、とかく對偶式に句が綴つてあること、頭韻だの、弄語(語呂、地口)だの、詞華言葉式ともいふべき誇張的、虛飾的の牽强附會な思ひ附き(コンシート)――所謂ユーフューイズム風の詞句――の多いことだの、散文の句が絶對に交つてゐないことだのが、いづれも此作者の初期、中期の作即ち『戀の骨折損』や『ロミオとジュリエット』や『リチャード三世』等と相共通する點なので、一五九四年以後の作ではあるまいと推定さ

れる。殊に、絶對に散文の句のないといふ例は、此作以外には『ヘンリー六世』の第一部と第三部とのみであるから、最も著しい特徴だといへる。

リチャード二世を主題とした劇は、シェークスピヤのゝ外に、なほ三種あつたといふ。そのうちの一種はシェークスピヤのより後に書かれたもので、其當時には公刊されるに及ばなかつたといふが、その作にはグロースターの虐殺事件も一場として編み込まれてあるさうな。又一種は主としてリチャードの少年時代を取扱つたもので、ウォット・タイラーの

暴擧やグロースターの死なぞが眼目となつてゐたらしいが、其脚本は傳はつてゐない。殘る一種は前記メイリックの作で、主として政治的目的から民心を煽動する爲に上演されたと傳ふるもの。

コールリッヂが此作を激賞したのは、寧ろ其特殊趣味からの詩人評なのである。實演さるべき脚本としては、之れをシェークスピヤ作中の最も力弱きものゝ一つだと評したサー・ヘンリー・アーヴィングの批判が言ふまでもなく當を得てゐる。讀む劇詩としてさへも、彼れが作中の上乘の部に屬せしむべきではない。といふのは、先づ第一に、作者の技

が、何といつても、まだ十分に練達してゐなかつた頃の作だからである。第二には、餘りに政治史的興味に偏して、女性に關した情趣が甚だ乏しい上に、滑稽の要素も全く缺け、人物も主人公リチャード王以外は概して類型的であり、其主人公其者とても、決して強い性格ではなく、隨つてイギリス國人に取つてすら、一般的感興の甚だ微薄な作だからである。然るにも拘らず、此作が不思議に沙翁研究家ばかりでなく、一般のイギリス人の眷戀をさへ牽いたらしく想像される。其證據には類似の作が他に三種までもあつた上に、實演劇としては毎に失敗に終るのが例

であつたのに、尙屢〻改作までして、前後三度まで上演されてゐる。すなはち、例のミャースがPaaldis Tamia中に錄してゐる所によると、シェークスピヤの名を一五九八年前に於て世に高からしめたは此作だとある。して見ると、其頃は舞臺上でも相應に注意を牽いたものらしい。が、作者の死後の上演は一六三一年の地球座以來ずつと途絶えたらしく、其次ぎは復辟(レストレーション)後の一六八一年まで間隔がある。其際のは原作の儘ではなく、時の劇作家ナサム・テートがイタリーの事跡に改作したものであつた。外題は『シ、リーの簒奪者』Sicilian Usurperで、筋もほしいまゝに添削された上に、

人名も地名も悉く變へられてあつた。劇場はシャター・ロイヤル。斯やうに改作に及んだのは、一つは王政復舊の政府に對して憚つたのであり、一つは實演劇としての缺點を補充しようといふ目的からであつたらうが、當局は三日目に上演の禁止を命じた。それは一應の臨觀をもせず、脚本の審査をも經ずしての禁令であつたから、改作者は蔭で不平や愚癡を竝べ立てたのであつたが、專制時代の習ひとて如何ともしがたかつた。但し其改作は改惡に外ならぬものであつたといふ。それから約四十年間は、全く忘れられたやうになつてゐたのを、一七二〇年に時

の詩人シォボールドが更に別に改作を試み、リンコン・イン・フィールドで七回ほど上演したさうなが、これまた改惡であり、不人氣、不成績であつたらしい。其次ぎは、一七三八年のコヴェント・ガーヂンで、これは特に上流婦人たちの懇望によつて復演十回に及んだといふ。其次ぎは其翌年で、これは四回だけ。一八一五年には名優エドマンド・キーンが上演を試みた。此時の脚本も甚しい改惡本であつた。それは座の黑衣役を勤めてゐたロートン (Wroughton) といふ者の改案に成つたもので、シェークスピヤの諸作、例へば『リヤ王』とか『アントニーとクレオパトラ』とか『ヘンリー六世』とか『トロイラスとクレ

シダ』とか『タイタス・アンドロニカス』とか、何でもかまはず、手當り次第に苟も利用し得られる筋の斷片や白の斷片を拾ひ集めて來て、あちこちへ繼ぎはぎ式に點綴した無法無慚な作であつたといふ。勿論成功はせなかつた。同じ年にマクリデーもバスで上演した。これはほゞ原作通りであつたといふが、やはり不人氣であつたらしい。一八五七年のチャールス・キーンの復演は、服裝、舞臺裝置、演出法等に、ともかくも空前の注意と努力とを惜まなかつた結果、目に訴へるものとして莊麗であつたといふ。原作では、公ヨオクの白中にのみ言はしめてある簒奪者ボリングブルック

のロンドン入りの盛況を歴史的ペーヂェントとして、故實をたゞして、所謂活歴式に極華やかに舞臺上に具體化して演出したのが一般の呼び物となつたのであつた。其ペーヂェントの一部として旅俳優とも見做さるべき所謂フール(童坊)の一群が現れて一種の滑稽踊りを演ずる條が歡衆の喝采を博したといふ。

其以後の上演は、一八九六年のベンソンのそれである。劇場はストラットフォードのシェークスピヤ記念劇場。

斯う見て來ると、實演に適せない作としては、復演の度數が比較的に多い。且つ改作を三度までも試みたのはシェークスピヤの作中で珍らしい例である。其理由は、恐らく作其者以外に――すなはち此作の背景となつてゐる歴史的事蹟に――求むべきであらう。

シェークスピヤが此作を書いた一五九四年ごろは、比較的長期であつたエリザベス女王朝の晩年で、ヘンリー八世以來漸く基礎を固めて來たチュードア系統の全盛期であつた。イギリス國としても、中興の英主エドワード三世の大陸に於

ける大戰勝以後の國威宣揚期であり、隨つて國民一般の愛國心が燻んであり、又燻んならしむべく種々の政策の取られつゝあつた時でもあつた。英國史蹟を劇化することが歡迎されたのは、主として此時代精神の結果であつた。ナショナル・ヒーローの名譽の代表として武名を海外に轟かしたヘンリー五世が寫されたり、國辱時代の一標本として、君民を規戒せん爲かの如くに王ジョンが描かれりたしたのも、一面の由來はそこに在る。按ふに、シェークスピヤが是等國史劇中に於て、ある時は、頻りに英國竝びに英國人の爲に氣を吐き、又ある時は、過去の事蹟に托して、英

國人を徒らに大陸諸國の摸倣をのみ是れ事とする猿猴民族だと罵つて、其激勵に力めたのも、恐らく同じ動機からであらう。さう考へて來ると、『リチャード二世』が、其書きおろし當時に於て、又その以後までも、作の價値以上に重んぜられた所以がほゞ推察し得られる。

そも〳〵英國が覇を歐洲に唱へ初めたのは十四世紀の中葉以後である。即ちプランダヂェネット王統の第七王、エドワード三世の時代からだといつて當然であらう。何となれば、此エドワード三世は所謂英佛百年戰爭の發頭人であつて、大陸諸國、特にフランスに對して英國が掌海權を握

るに至つたのは、此王の朝に於けるフランダースなるスロイス沖の大勝利からである。で、王は兵を大陸に進めて、クレシー、ポアチェーの二大戰で悉く佛軍を破り、王ジャン二世を虜にして、一千三百六十年に有利の和約をブレチニーで取結んだ。有名な黑太子エドワードが其英名を内外に轟かしたのは此間の事である。すなはち此時代は、英國としては、正に空前の國威發揚期であつたのだ。さうしてそれは第十五世紀に於けるヘンリー五世王の佛國侵略、第十六世紀卽ちエリザベス女王朝に於ける西班牙艦隊の擊滅と竝べ稱せらるゝ所の國家的誇りであつたのだ。とこ

ろが、太子エドワードは、其父王に先きだつて夭折してしまつたので、三世王が殂すると、太子の子のリチャードが、まだやつと十歳で、王位を繼承し、リチャード二世と名宣ることとなり、三人の叔伯父が其後見職を務め、國政を執つた。いづれも黒太子の弟で、三世王の二男、三男、四男に當り、長がランカスター公のジョン、次ぎはヨオク公エドマンド、其次ぎはグロースター公トマスであつた。其うちジョンとエドマンドとは本劇中に現はれる人物であり、グロースターも蔭の人物として噂には上る。

リチャード二世は、其卽位の初めには、賢明な黒太子の嫡

男たることを辱めない英邁の資とも思はれたのであつたが、長ずるにつれて、期待に背き、斗筲の小人輩を嬖昵して濫りに要職を授けなどしたゝめに、先づ貴族連の憤りを招いた上に、酒色に溺れ、奢侈を好み、常に宮廷内に一萬人の直參を養ひ、庖廚の吏だけでも三百餘人に及ぶといふだらしのない豪華を衒つたりしたので、國民一般の反感を買つた。其結果、貴族らは王叔の一人グロースター公トマスを推して首領となし、一千三百八十七年、議會の決議を以て、王の嬖臣を逐ひ、政權を王の手から取上げてしまつた。ところが、其翌年に至り、約一年半の間じつ

と屏息してゐた王が猛然として起ち、電光石火的のクーデターを下してグロースター黨の勢力を顚覆し、新政を布き、且つグロースター公をフランスのカレー市に幽した。公は後幾程もなく該地で死んだが、それは王が人をして暗殺せしめたのだといふ噂が高かつた。

主權を復して後の王の振舞は、以前に倍して非道であつた。日夜驕奢の宴樂に耽つて嬖臣に過分の俸祿を與へたりした爲に内帑しば〳〵空乏を告げ、財用に窮するの餘り、或ひは不當な重稅を課し、或ひは妄りに民財を沒收しなどして、ます〳〵人望を失つた。其際、王叔ランカ

スター公ジョンの嫡男ボリングブルック公ヘンリーとノオフォーク公トマス・モーブレーとの間に爭訟が起り、當時の慣例によつて、其爭ひを王の面前で行ふ眞劍勝負で決することとなつたのであつたが、王は一旦はそれを許可しながら、いよいよといふ間際となつて、だしぬけに中止を命じたのみか、理不盡に二人を國外に放逐し、剩へ其翌年叔父ランカスター公の逝去するや、嫡子たる右のヘンリーの追放中であるのを幸ひとして、悉く其采邑を沒收してしまつた。

本來件の爭訟は、本劇中にくはしく寫されてある如く、グロースター公の暗殺に關する王自身の嫌疑が元で始ま

つた事で、ボリングブルックは、寧ろ王の名の爲に、ノオフォークの失言を咎めて決鬪に及ばうとしたのであつたのを、王は不法にもかやうな處分をした。で、ボリングブルックは憤怨し、ブルタニュ公の援けを借り、亡父の遺領恢復を名として兵を起し、王がアイランド征討の爲に不在であるのを好機として突然に英國へ乗込んだ。すると、ノオサンバランド公父子を始めとして貴族らは大概これに加擔した。のみならず、王の留守を預つてゐた王叔ヨオク公エドマンドまでが王に背いてボリングブルック方となつてしまつたので、王は進退谷まつて、餘儀なく王位をヘンリーに讓るに至

つた。此間の經緯は本劇中に殆ど史實のまゝに取扱はれてゐるといつてよい。其後幾ばくもなくて王は其幽處で逝去したが、其死は非業であつたと言ひ傳へられた。

プランタヂェネット家の正系はリチャード二世で絶えて、ヘンリー四世の名で王位に登つたボリングブルックからランカスター系統が始まる。さて其子ヘンリー五世を經て其孫ヘンリー六世の世に至り、所謂薔薇戰爭が起り、英國内に二大黨が對立して、長い間相爭つた。薔薇戰爭といふのは、一方ランカスター家の黨與は紅薔薇を以て、又其敵ヨオク家の黨與

は白薔薇を以て其徽章として戰つたからである。此亂は、譬へばわが南北朝のそれなどに比すべき內訌で、英國の封建貴族の尤なる者の大概は此亂の爲に滅びたと言ひ傳へられた程の大亂なのである。さういふやうな關係から、其遠源とも見做されるリチャード二世朝の史蹟は、イギリス人に取つては、頗る意味の深いものとなるのである。シェークスピヤが、其作者見習ひ時代に於て、舊脚本の『ヘンリー六世』の第一部、第二部、第三部を補修し、次いで又薔薇戰爭の終局を語らんとするかの如くに『リチャード三世』を作し、更に其技の圓熟するに及んで、『ヘンリー四世』前

後二部と『ヘンリー五世』とに椽大の筆を揮つたのは、蓋し此期間に於ける史蹟が最も多くイギリス人の感興を牽くものであつたからであらう。ちやうどわが明治の初期に、『太平記』や『平家物語』の話材其儘の劇化が活歴といふ稱呼の下に歡び迎へられたと同理で、あまり脚色を加へないはうが時需に適つてゐたのでもあらう。

本劇の大體は例のホリンシェッドの英國史通りであるといつてよい。隨つて劇としては不具な點が尠くない。第一、性格描寫が、主人公の王以外は、類型程度にしか物されてない。王だけは立派に活きた人として描かれてある

が、それとても餘りに薄弱な、善にも弱く、惡にも弱い、操持の無い、優柔な、小詩人的の、センチメンタルな、平凡人として現はされてあるから、事件や事情には、多少の悲劇的要素が具はつてをりながら、同情をも反感をも決して手強くは呼び得ない。ボリングブルックの性格描寫の如きは、後年ヘンリー四世として此作者の手によつて見事に寫しいだされた場合とは全く別で、何等一奸雄らしい深みもなく、非實際的な主人公リチャードとの對照上、單なる實際的な政治家兼武人として畫かれてゐるに過ぎない。ランカスター公ジョンとヨオク公エドマンドとには比較的主要な人物

として其描寫に意が致されてあるとも見えるが、而も前者の如きは、其臨終の長ゼリフだけが眼目であり、後者とても十分に個性化されてゐるとは言へない。公ノオフォークは、序幕に現はれた處では、ボリングブルックとは大分異つた所のある武人とも見えて、ちよつと注意を牽くに足るが、惜しいことにそれッきり立消えてしまふから、詰らない。立消えといへば、グロースター公夫人の如きも序幕だけで立消えになり、さなきだに女性的興味の乏しい此劇をますゝ淋しいものにしてしまつてゐる。唯一人のヒロインたる妃イサベラとても、其現はし方が月並であり、其

描寫が刻明でないから、影坊師程度、木偶人程度の働きしか爲得ない。それこれ實演する劇としては至つて不具な脚本であるのである。

けれどもその缺點を補ふものが讀み物としての其詞句の上に在る。勿論、中期の作だから、作者の圓熟期のに比すべくもないが、似而非詩人らしい主人公の性格を如實に示すとも感ぜらるゝ牽强な比喩や浮華な修辭に富んだ長ゼリフの如きは、頗る面白く味讀される。コールリッヂが此作を激賞したのは、主として同氣相求めた主人公の性格に對する同情であつたらうが、一面は此作の修辭美

を喜んだのでもあつたらう。とにかく、シェークスピヤの中期の作として、其作劇術の發達を追跡する爲の好資料であることは疑はれない。

大正十五年一月上旬

於熱海雙柿舍

譯者

登場人名

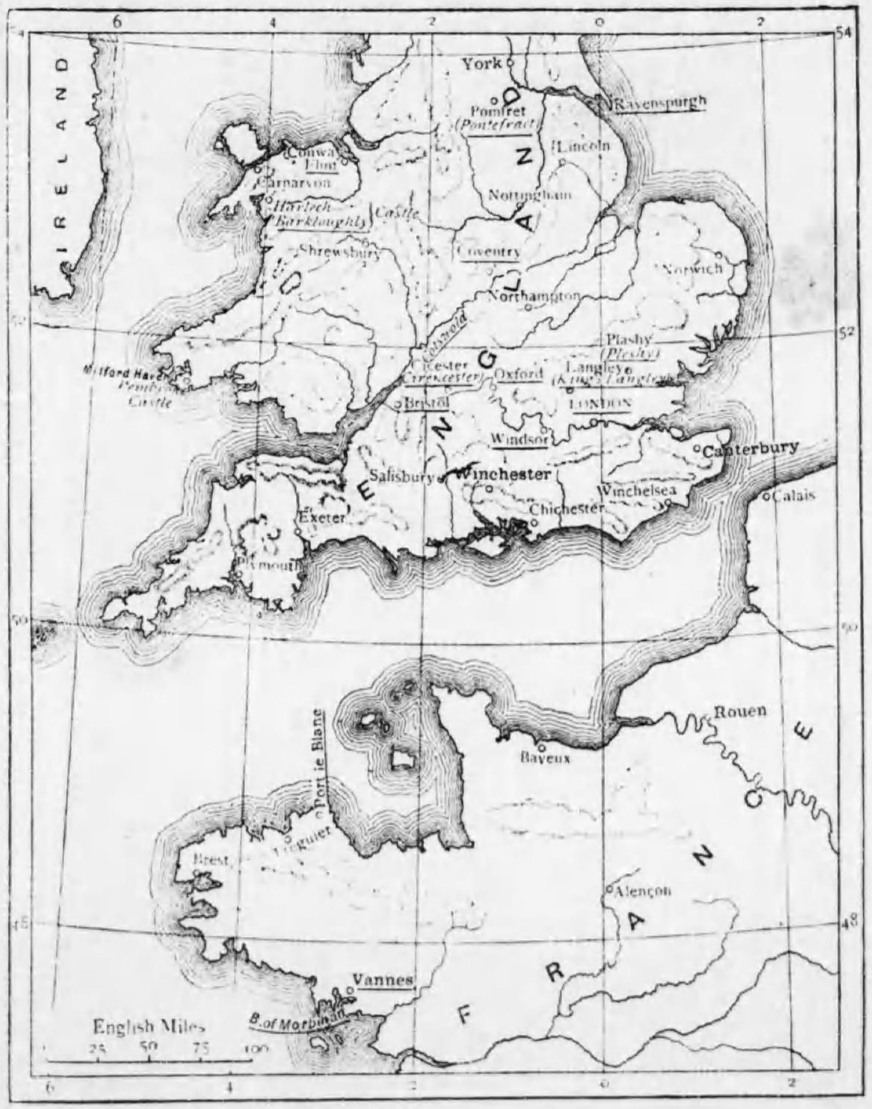
王リチャード二世。

ガントのジョン、ランカスターの公爵。

ヨオクの公爵、ラングリーのエドマンド。王の叔伯父。

ヘンリー、ハーフォードの公爵、**ボリングブルック**と綽名さる。ガントのジョン公爵の男、後に王となり、**ヘンリー四世**と稱する。

オーマールの公爵、ヨオクの公爵の男。

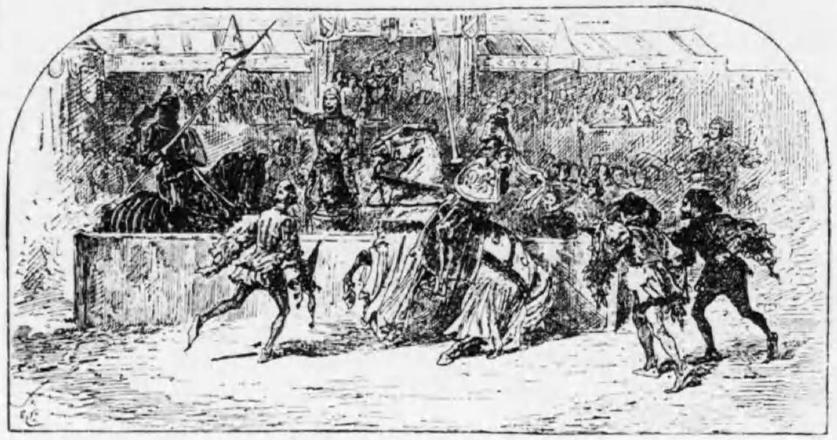


トマス・モーブレー、ノオフォークの公爵。
サリーの公爵。
ソリスベリーの公爵。
卿バークリー。
ブシー
バゴット
グリーン　（リチャード王の嬖臣。）
ノオサンバランドの伯爵。
ヘンリー・パーシー、前者の男、熱拍車（ホット・スパー）と綽名さる。
卿ロッス。

卿ウィロービー。
卿フィッヲーター。
カーライルの監督（ビショップ）。
ウェストミンスターの院長（アボット）。
卿マーシャル。
士爵（サー）スチーブン・スクループ。
エクストンの士爵（サー）ピヤース。
ウェールス民軍の隊長。
妃（リチャード王の）。

ヨオクの公爵夫人。
グロースターの公爵夫人。
王妃に侍する女官。
其他、貴族、傳令使、吏員、兵士、二人の庭師、牢役人、使者、馬丁、竝びに侍者ら。

場所 イングランドとウェールス。



第一幕　第三場

リチャード二世

第一幕

第一場　ロンドン。王宮内。

英國王リチャード二世、其伯父公爵ガント、ジョン、其他の貴族竝びに侍臣等を従へて出る。

王　老ランカスター、ガントのジョン公爵、あん

たの子息のヘンリー・ハーフォードがノオフォーク公爵トマス・モーブレーを業々しく逆賊呼ばはりに及んだ事件に就いて、とうに二人を對決せしむべき筈であつたが、公務が多端な爲つい今日まで遷延した。　かねての誓約通り、子息をおつれなすつたか？

ガント　はい、つれて參りました。

王　それから、子息が彼れを告訴したのは、私の宿意のためであるか、或ひは何か叛逆の證跡を握つたため、忠良の臣下として告發したのであるかそれをお聞糺しなすつたか？

ガント　さア、其儀は、手前が取糺し得ました限りでは、決して私怨のためでは無く、陛下に對して容易ならん企のあることを發見したがためだと存ぜられます。

王　（侍者に）では、二人を呼びだせ。　怒つたる面と面とを相對せしめて、原被双

方に思ふ存分の事を言はせよう。　二人とも傲慢な上に、憤激してをるから、烈火の如く性急で、荒海のやうに、開く耳を持たんであらう。

ボリングブルック　と　モーブレー　とが　出る。

ボリ　仁愛優渥なるわが君の御身の上に、幸福なる歳月の長へに下りますやう！

モー　日を重ぬると共に御慶福ます〳〵加はり、天神も遂に下界を羨んで、陛下に不死の特權を獻ずるに至りますやう！

王　双方に禮をいひますぞ。　併しどちらかゞ追從をいつてをるのであらう。それはお前たちが互ひに彈劾して、逆賊呼ばはりをしあうてをるので分るではないか？　ハーフォードの從弟よ、お前はノオフォーク公、トマス・モーブレーに、一體、どういふ罪惡があるといふのぢや？

ボリ　第一に、天よ、願はくは自分が申立つることを御保證下さい！　自分が君前へ、彈劾者となつて出頭いたしたのは、一へに我君の尊體をいたはり奉る

忠臣の至誠からであります、決して不心得の私憤などの爲ではありません……さて、トマス・モーブレー、只今汝に向つて申す事をよッく聞け、自分は苟も口外したことは、下界では此肉體を以て立證し、天上ではわが靈魂をしてきッと答辯せしめるから。　汝は逆賊たるには其素性が善きに過ぎ、生かしておくには其性質が惡きに過ぐる大惡漢である。　何となれば、空が水晶の如くに清らかであれば漂ふ村雲の醜さは一段と目立つからだ。更に改めて侮辱を加へるために、逆賊といふ醜名を汝の喉へ押入れ、陛下のお許しさへあれば、かく申し立つるとの一々を、此正義の劍を以て、處を去らず、立證して見せるぞ。

モー　（王並びに列座に）口吻が冷かだからとて、熱誠が無いのだとお思ひ下さるな。われ〳〵二人の間の爭訟は、口汚く罵りあふ婦女子式の言葉戰ひを以て裁決せらるべきものではない。　その爲には、須からく此熱した血を冷却せ

しむべきである。　併し自分とても、かやうに罵倒されて、沈默しをるほどに堪忍强い男ではありません、が、第一、陛下に對して御不敬と存ずるから、心の手綱をゆるめて勝手な惡口を口走らせることが出來んのです。　でなかつたら、逆賊、反賊などといふ言葉が彼の喉元へ二倍の勢ひで駈込むでもありませう。　で、彼れが王族であることを姑く差しおき、陛下の御近親では無いと假定しまする以上、自分は彼れを卑み、彼れに唾きし、彼れを卑怯卑劣の讒誣者と呼び、且つそれを立證せんために、彼れに不對等の利便を與へてゞも決鬪いたします。　たとひ雪に凍るアルプスの絶巔までも、もしくはいかなる人跡を絶つ、曾てイギリス人の足を踏み入れたる事もなき異鄉の荒野原まで徒步にて駈け行けと命ぜられまするとも、決鬪いたします。　それまでは一切の希望を掛けて、彼れの申す所を悉く僞りであると誓言いたすのを以て、自分が忠誠の保證と御覽ぜられたい。

ボリ　色を失つて慄へてゐる卑怯者、さ、王の近親たる資格を抛つと同時に、質を投げるぞ。　もう自分は汝が尊敬を口實に……其實は恐ろしいからだが……除外しようとしてゐる王族の血統ではないぞ。　心に覺えの罪惡に戰く汝にも尙此名譽の質を取上げる勇氣があるなら、拾へ。　騎士道のあらゆる典禮に則つて決鬪して、今、申し立てたる事乃至それ以上汝が案出し得る限りの曲事を立證してくれる。

モー　受取らう。　而うして嘗てわが此肩に騎士の榮爵を荷はせたる劍によつて誓ひ、苟も騎士道に適ふ限りのあらゆる方式に從つて、相手にならう。　萬一にも自分が逆臣であるなら、……　不義不正を行つたなら、……馬から生きては降りまいぞ。

王　（ボリングブルックに）モーブレーの罪科としてお前が摘發するのはどんな事か？　逆意があると認めた程なれば、容易ならんことであらう。

ボリ　申し上げることの眞實は、一命を掛けて保證いたします。第一、モーブレーは、御委托の名義で受取りました金額八千ノ！ブル卽ち陛下の兵士らに頒つべきものを、おのが陋劣な用に供するために縱まに保留しました。かくの如きは明かに不正不義、賊臣の振舞であります。のみならず、此十八ヶ年間、わが國に於て目論まれ企まれましたあらゆる叛逆の源泉は悉くモーブレーであつたと斷言し、且つ其れを直ちに此ところに於て若しくは我國人の既に觀測し得たる限りのどんな遠隔の地方へでも罷り向つて、決鬪によつて證明します。　まだ其上に、改めて斷言し、且つ惡逆なる彼れが一命を徵して、立證すべき罪科があります。　それは、彼れがグロースター公を暗殺せんと企て、輕々しく信ずる公が敵黨の者を敎唆し、遂に罪なき公の靈魂をして血河のうちに流逸せしめたことであります。　こゝに於て乎公の碧血は上帝に哀訴した彼のアベルのそれの如くに、舌の無い墓穴の底

から「何卒彼れの罪を糾し嚴罰を下しくれい」と自分に向つて叫んだのであります。　すなはち、わが榮譽ある血統を誓ひに掛け、此腕で以て彼れが罪を糾すか、然らざれば此一命を失はうと決心してをります。

王　舞ひ上る隼にも比すべき高言ぢや！……ノオフォークのトマスよ、今の言に對してお前は何と答へる？

モー　おゝ、陛下は、姑くの間お顏をおそむけ下さい、又お耳をもおふさぎ下さい、手前があの御血統けがしに向つて、彼れのやうな汚らはしい虛言者は、神人共に憎み卑むといふことを告げまする間。

王　モーブレー、予は、目でも耳でも、依怙贔屓はせん。　彼れが予の同胞であつても、いや、此王國の世子であつてもぢやが、彼れは伯父の子たるに過ぎんから、此梃の尊嚴に掛けて誓ふが、彼れが神聖な王室の近親であることは決して何等の特權をも彼れに與へない、またそれが爲に予の至嚴至直なる

心をして其中心を誤らしめるやうなことはない。　モーブレー、彼れもお前も予が臣下ぢや。　遠慮せんで、憚る所なく、どんなことでも公言するがよい。

モー　では、……ボリングブルック、汝は、心臓の眞只中から、いや、虚偽で固めた其喉笛のどん底から、嘘を吐いてゐるのだ。　カレー市の爲に自分が受領した彼の金額の三分の一は、其際、正當に陛下の兵士らに頒ち遣はしたわ。殘額を保留したのは陛下御承認の上の事だ。　先年お妃をお迎ひのために、自分がフランスへ出張した當時の、莫大な御負債の殘額として頂戴しておいたんだ。　さ、先づ、此大虚言を呑込め。　次ぎに、グロースター公は、おれは決して殺さん、いや、それに關しては、むしろ臣たるの職責を怠つたのでお咎めをさへ蒙つた。……が（とガントのジョンに向つて）當の敵の嚴君たるランカスター老公、あなたに對しては、手前、今でも後悔してゐますが、嘗て

暗殺を企てゝした……が、それは、聖餐を受ける前に既に一切を白狀して悉く御宥免を乞ひ得た筈です。　あれは慥かに手前の罪過です。　が、其他の彈劾に至つては、卑怯なる惡漢の私憤の虚構たるに過ぎんから、身を以て大膽に之を拒んで、此方からもあの傲慢なる僞り者の足元に質を投げて、彼れが心臓中の最良の鮮血を灑がせて自分が忠良の武士であることを立證します。　それを速かに實行するために御審判日をお定め下さるやうに悃願いたします。

王　（思入あつて）怒りに燃ゆる兩士よ、とくとわしのいふことを聞いて、血を流さんで癇を療治する工夫をしなさい。　わしは醫者ではないが、藥方を斯う指定する。……怨憤深ければ切開もまた深きに過ぎんとす。　忘れよ、恕せよ。　妥協せよ、和睦せよと。　醫師のいふ所によると、今月は血を取るにはよくない月ぢや。（ガントのジョンに）伯父上、この一件は中止させよう。

わしはノオフォークをなだめるから、あんたは息子さんをなだめて下さい。

ガント　仲裁役は老人に相應です。……倅、其ノオフォークの質は投捨ててしまひなさい。

王　さうしてノオフォークは、彼れのを。

ガント　こら、ンリー、早く！　此上、父をして命令を重ねしめてはならんわ。

王　ノオフォーク、投捨ていといふのに。　拒むのは無用ぢや。

モー　陛下（と王の脚下に跪きて）むしろ此一身を投げ捨てます。　此一身は陛下に負ふ所のものです、如何やうとも御意のまゝに。　併しながら、假令君命でも、恥辱は受けられません。　死後なほ墓の上に存ふべき美名は、王の命でも汚し辱めることは出來ません。　かやうに侮辱され、彈劾され、面皮を剝がれ、讒誣の毒槍によつて魂までも貫かれました以上、其毒を吹き出しをつた彼れが心臓の碧血を以てするの外に、此深創を緩和する藥膏はございま

ません。

王　怒りは忍ぶを正しとする。　其質をわしにわたしなさい。　豹は獅子のなすがまゝになる筈のものぢや。

モー　でも、よもや斑點までも亡くしは致しますまい。　汚名をお雪ぎ下されゝば、此質を捨てます。　陛下、人生の與ふる最上の寶は汚れない名すなはち美名であります。　其美名が廢れば、人間は金粉を塗つた赤土か、彩色をした粘土たるに過ぎません。　忠臣の胸の勇猛心こそ三重四重の匣の中に祕藏せらるべき寶石です。　名譽は手前の生命です。　生命と名譽とは根を同じうしてをります。　名譽を奪はれゝば手前の命はなくなります。　陛下、どうか名譽を試すことをお許し下さい。　名譽は手前の生命です、名譽のためには一命を堵します。

王　（ボリングブルックに）從弟、其質を捨てなさい、先づお前から。

ボリ　おゝ、神よ、わが靈魂をしてさやうな重罪を犯さしめたまふ勿れ！　現に父が見てゐる處で、どうしてそんな不面目な振舞が出來ませうぞ？　敵手はあんな弱蟲の臆病者だのに、かりにも蒼ざめた乞食面なんぞをいたして、わが家の美名を辱めるやうなことが、どうして出來ませう？　わが舌にそんな懦弱な、わが名譽を傷附ける卑劣な言語を吐かせたり、そんな醜陋な談判を試みさせたりするくらゐなら、そんな臆病な、陋劣な、わが意に悖る舌の根は、此齒で咬み切り、鮮血の漓るまゝを彼奴が面上へ吐きかけて、長く赤恥を搔かせてくれます。

王　此うちガントのジョンは入る。

予は命令すべく生れた、賴むのは予の任でない。　命令して和睦せしめることが出來ん以上、來る聖ランバートの祭日（九月十九日）に、二人とも、コヱントリーへ出頭せい。　約に背くと一命に係はるぞ。　あそこで劍と槍とで以て双方の積り募つたる宿怨を決せしめることにしよう。　仲裁が無效となつた上は、騎士道の法規に準じて、勝敗によつて正邪を決せしめる。……式部官、決鬪係りの者に命じて、此内爭をよろしく處理させてくれ。

皆入る。

第二場　ランカスター公爵の館

ガントのジョン公爵と共に故グロースター公爵夫人出る。

ガント　あゝ〳〵、わたしはウッドストックの血つゞきであるのだから、あんたの其歎きを聽くまでもなく、弟の虐殺者に復讐しようと思ふのが當然です！　けれども其非道を罰することは、それを犯した當人でなくては出來んこと

なのだから、此裁判は神慮に任せるより外に爲方がない。　神々は常に時機の熟するを俟つて、犯罪者の頭上に嚴罰をお下しになる。

公夫人　肉親の兄弟といふことも、あなたには、それ以上の刺戟とはならんのですか？　あなたの血には、もう活きた火は燃えてゐないのですか？　エドワード王の七王子の、あなたは其一人です。　其七王子は王の神聖な血汐を湛へた七つの壜か、一つの根から生ひ出でた七本の幹のやうなものです。其七つのうちには自然と乾上つてしまつたのもあり、運命の爲に斫り取られたのもあるけれど、エドワード王の貴い血をゆたかに湛へて、いや榮える金枝玉葉と世にあがめられてゐたわたしの殿御、わたしの命、わたしのトマスは、グロースターどのは、惡人のために、殘忍無慚な斧で斫り倒され、眞夏の綠り葉も悉く色を失ひ、壜は碎けて、其貴い血もこぼれてしまつた。　ねえ、ガントさま、夫の血は、取りも直さず、あなたの血です。　あなた

を生んだ其床が、其腹が、其種が、其同じ型があの人を人間にしたのです。あなたは今生きておいでだけれど、弟が殺されたのは、御自分が殺されたも同然です、お父さんそつくりの弟が淺ましい死を遂げたのを平氣で見ておいでなのは、お父さんの御最期を歡迎しておいでも同然です。　それを忍耐だとおつしやるのですか？　いゝえ、無氣力ですそれは。　平氣で弟を殺させておいでなのは、御自分の命をも失ひなさる近道です、虐殺者に殺し方を敎へるのです。　賤しい者がすれば忍耐の德であることも、貴人に取つては卑怯臆病です。……さア、此上、何といはう？……あなたの命をお守りなさる法はわたしの夫の敵討をなさるより外にはありません。

ガント　神さまの御名代のしたことだ。　神の御前で聖油を塗られた御代理者が殺したのであつて見れば、若しそれが曲事なら、天がお罰しなさるであらう。わたしは神の御代理に、怒つて刃向ふことは出來ない。

公夫人　ぢや、わたしは、あゝ〳〵、だれに縋つたらよからう！

ガント　神さまに。　神は未亡人の身方だ、保護者だ。

公夫人　（力なげに）ぢや、さうしませう。…　ガントさま、御機嫌よう。　あなたは、これから、コヱントリーへおいでになつて、甥のハーフォードと殘虐なモーブレーとが決鬪するのを御覽になるのですね。　おゝ、夫の蒙つた寃の怨みよ、ハーフォードの槍尖に留つて、モーブレーめの胸元を突き貫いてくれ！　萬一、第一の手合せが不首尾であつたら、モーブレーが胸にこだはる罪惡の重荷が其疲れ馬の脊骨を碎いて、卑怯臆病の主めは眞逆様に場内へ投落され、甥ハーフォードの槍玉にあげられをれ！……　ガントさま、さやうなら。　あなたの弟であつた人の妻は、たゞ愁歎だけを友達にして、一生を終はらねばなりません。

（公夫人しほ〳〵と行きかける。）

ガント　妹、さやうなら。　わたしはコヱントリーへ往かねばならん。　お互ひに恙ないやう！

公夫人　（立ちどまつて）でも、もう一言。（戻つて來て）撥ね戻ればとて、わたしの悲みは球のやうに輕くはなく、虛ではなく、重い、充實した悲みなのです。　（と言ひかけたが）　いや〳〵、言はないでお別れしませう、悲みは果てたと見えても迚も果てるものぢやァないから。……お兄さんのエドマンド・ヨオクさまへよろしく。　さ、これでおしまひです。（ガント行きかける）。　いゝえ、まだ往ッちやいけません。　これでおしまひですけれども、さう急いで行かないで下さい。　まだ少しいふことがあります。　ねえ、あの方に……あゝ、何だッけか？……わたしプラッシーにゐますから、大急ぎで訪ねて來て下さいッてね。……あゝ〳〵！　ヨオクどのが見えたとて、あそこに何があらうぞ？　住む人はをらず、四方の壁には飾りはなし、詰め所〳〵にも家來はゐず、敷

石を蹈む足も見えない！　お出迎ひをする者はわたしの泣き聲ばかり！
ですから、どうぞ訪ねて來て下さるなといつて下さい。　入らしつても、在るものは、どこにも有りがちの愁歎ばかり。……たつた一人ッきりで死場所へ往きませう。……涙に曇る目で、最後のお暇乞ひをいたします。

左右に別れて入る。

第三場　コヱントリーの競武場

式部官と王の叔父ヨオク公の男オーマール公爵が出る。

式部官　オーマール卿、ハーリー・ハーフォードはもう武裝をすまされましたか？

オー　はい、悉く用意に及んで、入場を俟つてゐます。

式　ノオフォーク公爵も元氣に勇敢に呼び出しの喇叭を俟つてをられます。

オー　ぢや、戰鬪士たちの準備は悉く出來たといふものだ。　此上は陛下の御臨場を俟つばかりです。

喇叭の音。　と王は貴族らを引連れて出る。　ガント公爵を先に、嬖臣ブシー、バゴット、グリーンをはじめ其他の者。　一同が着席した時分に甲冑姿の被告モーブレーが傳令使と共に出る。

王　式部官、あの戰鬪士に、甲冑打扮で此處へ參つた仔細を訊ねい。

式　（モーブレーに）神の御名並びに王の御名によつて、其許が何人であるかを名宣りなさい、又何故にかく武裝に及んで此ところへ參られたか、又何人に對して何等の故に挑戰に及ばれるか、騎士道の誓約通り、眞直に申し述べられませい、然るときは、神必ず其許の武勇を守らせられませう！

モー　自分はノオフォークの公爵トマス・モーブレーでござる。　神明に誓つて破

るべからざる騎士道の盟約に從ひ、ハーフォードの公爵が告訴は、神明を、わが王を、拙者を欺き僞るもの、すなはち其讒誣に對し、神明に、わが王に、われらが子孫に、神助によつて、此腕によつて、われらが忠誠を立證せんために罷りいでたのでござる。　天よ、わが正義の戰鬪をお守り下さい！

喇叭の音。と告訴者ボリングブルック甲冑姿にて第二の傳令使と共に出る。

王　式部官、あれへ參つた甲冑の騎士は何者であるか、又何が故に戎具を著用して參つたかをたづね、法規通り、正式に、其主張の正當なる所以を陳述させい。

式　（ボリングブルックに）其許の姓名は？　如何なる故にリチャード王陛下の此競武場内へは參られましたぞ？　當の敵人は何人でござる？　してまた爭訟の御主意は？　神助を望まれまするならば、眞ッすぐに、正義の騎士らしく

御返答なさい。

ボリ　自分はハーフォード、ランカスター並びにダービーの公爵たるハーリーでござる。　本日武裝して此競武場に罷りいでましたる所以は、神助とわが武力とによつて、ノオフォークの公爵トマス・モーブレーが汚き怖るべき反賊たることを、神明に、わが王に、われら自らに立證せんためでござる。天よ、正義を奉ずる自分が戰鬪をお守り下さい！

式　（廣く場内の人々に）此公平に處理せらるべき爭訟は、專ら式部官及び特に其爲に任命せられたる吏員のみの宰る所でござる、其他の輩にして理不盡に場を侵すに於ては、死を以て罰せられまするぞ。

ボリ　式部卿、王の御前に跪いて、御手に接吻することをお許し下されたい。　われ〳〵二人は、譬へば、長途の回國に立出でんとする者に似てをります。次ぎに、友人たる人々にも、懇ろに告別がいたしたい。

式　（王に）告訴人が恭しく陛下に御挨拶を申し上げ、お手に接吻して、お暇乞ひがいたしたいと願ひまする。

王　座を離れて彼れを抱かう。（と立上りて）従弟、ハーフォードよ、お前の主張が正義ならば、此御前試合に幸運であるやう！　わが血よ、さらは！　よしお前がそれを亡失しようとも、予はそれを悲むばかりで、敢て復讐することは出來ん。

ボリ　おゝ、決して其御目を涙でお汚し下されまするな、よし手前がモーブレーの槍尖に貫かれませうとも！　小鳥に於ける隼の如き確信を以て、手前は彼れと戰ひます。　では、陛下、お暇をいたゞきます。……従弟オーマール卿、さやうなら。　死ぬか生きるかの瀬戸ではあるが、病み疲れてはゐません、若く、且すこやかに、快活に、わがイギリスの盛宴に於ての如く、一等最後を此上もない美味と歡迎します。……（ガントのジョンに）おゝ、自分をお生

み下された父上よ、あなたの青年時代の精神をわたくしの身に復活させて、二倍の勇氣を奮ひ起させ、めざましい勝利を得させて下さい、あなたの祈りを以てわたくしの此鎧を鐵壁たらしめ、あなたの祝福によつてわたくしの此投槍をモーブレーの甲冑を封蠟扱ひにするほどに尖鋭ならしめ、ジョン・ア・ガントの英名をして其伴たる者の武勇によつて更に新たなる光明を放たしめて下さい。

ガント　神がお前の正義をお守り下さるやうに！　速かなることは電光の如く、敵を駭かすことは雷の如く、疊みかけて、醜敵の兜も碎けよと打込めい。　若い血汐を沸き立たせて、勇敢に戰つて、生存してくれい。

ボリ　わが無罪と聖ジョールジとの力によつて、必ず勝利を得ます！

モー　神慮、運命がどうあらうと、命を失はうと失ふまいと、自分は飽迄もリチャード王陛下の誠實忠直の臣でござる。　本日わが敵と勝負をいたすのは、

恰も會心の盛宴に臨むと一般で、欣喜雀躍の至りであります、囚人が其あさましい鐵鎖を釋かれて、黄金に比すべき自由を回復せんとする時の喜びもこれほどではあるまいと存ずる。　大王並びに同僚の貴族たち、尙此末長くお榮えなさい。　手前は遊興に赴く如く、悠然、欣然として戰鬪に赴きます。　正しき者の胸は常に安らかです。

王　（モーブレーに）わが卿よ、さやうなら。　お前の目のうちに勇氣と美德とが安住してをるのが認められる。……式部官、裁判の開始を號令して、始めさせい。

式　ハーフォード、ランカスター並びにダービーの公爵バーリー、槍をお受取りなさい。　神明、正義の者を守らせられまするやう！

ボリ　大塔の如き確信を抱いて申す、アーメン！

式　（第二の傳令使に）此槍をノオフォークのトマスどのへ。

第二の傳令使、槍を受取りて、ノオフォークの方へ持ちゆく。　其間に第一の傳令使が進み出る。

第一傳　ハーフォード、ランカスター並びにダービーの公爵バーリーは、ノオフォーク公爵トマスが神明に對し、國君に對し、彼れに對して虛僞者、反逆者たることを、神明に對し、國君に對し、彼れに對して立證せんために、而して萬一立證し得ざる場合に於ては虛僞卑怯の汚名を蒙るべく、この處に罷りいで、彼れに決鬪を促しまする。

第二傳　ノオフォーク公爵トマス・モーブレーは、ハーフォード、ランカスター並びにダービーの公爵ヘンリーが、神明に對し、國君に對し、彼れに對して不忠不義であることを立證せんために、而して萬一にも然し得ざる場合には虛僞卑怯の汚名を蒙るべく、此ところに罷りいで、勇敢に、熱心に、決鬪開始の合圖を相俟ちをりまする。

式　喇叭を吹き鳴らせい。……鳴つたらば、お始めなさい。

合圖の喇叭鳴る。

二人進む。既に闘はんとする。

王　と王が手に持つてゐた梃を抛つ。

お待ちなさい、王が梃をお投げになりました。

（式部官に）兩人に兜をぬがせ、槍を捨てさせて席に戻らせい。（左右に向ひ）予に從いて參れ。（席を離れて、先に立ちながら）熟議の上で兩人に申し渡すまで、喇叭を吹け。

王は貴族ら一同を從へて一隅に退き、何か協議する體。

やゝ長き間。其間喇叭を盛んに吹き鳴らす。

やがて王は貴族らを從へて又もとの席へ戻る。

（ボリングブルックとモーブレーに）近う。

これにて二人は王の前へ進む。

只今貴族たちと協議の上決定したことを承れ。……わがイギリスの國土は、假にも内爭の爲に、我がみづから愛しみ育てたる國民の鮮血を以て汚さるべきでなく、まつた同胞の劍を以て同胞の肉を裂くの慘劇は、予等の見るを惡む所である、のみならず、今や漸く幼な兒の將に眠に就かんとするが如くに、國内辛うじて平和ならんとする時に當り、驚の如き傲慢不敵なる野心を抱き、嫉妬偏執を逞うして、騷然たる軍鼓を亂調子に打鳴らし、天地に反響する大喇叭を怖ろしげに吹き轟かし、劍戟の鏘鏗たる怒號を以て平和の眠を驚かすに於ては、平和は恐れて直ちにわが國から逸し去るであらう、而うしてわれ〳〵は、河と流るゝ同胞の血汐をば徒渉りせずばなるまい。　故に、其方たちを追放の刑に處する。……從弟ハーフォード、其方は、今から十回の夏がわが麥畑に收穫を齎したまでは、謫處に居留まつて、決して此美なる國へ足を蹈み入るゝことは相成らんぞ。　違背すれば、命

に及ぶぞ。

ボリ　仰せに從ひます。　陛下の御身を溫むる太陽が自分をも照らすといふのを、せめてもの慰めといたしませう。　王者の身を飾る其金色の光線が謫竄の此身にも同じ光をあびせてくれるだらう。

王　やい、ノオフォーク、其方には、不本意ながら、一段と重い宣告を下さねばならん。　其方の追放には期限がないぞ。　ひそかに徐ろに過ぎて行く時も期限のない流刑をば如何とも爲し得ぬであらう。　其方には、「決して再び歸る勿れ、背けば一命に及ぶ」といふ絶望の宣告を申し渡すぞ。

モー　大王陛下、かやうな御宣告を、陛下のお口から承はらうとは、曾て思ひ設けませんでした。　外國へ追放などゝいふ深傷よりは聊かましな御待遇をいたゞかれることゝ豫期してゐました。　此四十年間言ひ馴らしたイギリスの國語を、今から後は捨てねばならん。　けふからは、此舌は、線の無いヴ

イオルや竪琴も同樣だ。　でなくば、函の中にしまひ込んであつた寶物の樂器だ、開けたところでどうして彈いていゝやら解りやアしない。　陛下が此口の中へ此舌を幽閉して、齒と唇とで二重に戶ざしをなすつた以上、これからは只もう鈍な、わからずやの無知や無感覺が手前の牢守となるのです。　乳母にあまへて片言を習ふには、もう齡を取り過ぎました。　して見りや、此舌に國語を使はせない御宣告は、無言で死ねと言ひわたされたも同然です！

王　愚痴をいつたとて役には立たんぞ、宣告してしまつた上は。

モー　ではもう明るい祖國に脊を向けて出掛けます、果知らぬ夜の物凄い昏闇に住む爲に。

（二人ともに行きかける。）

王　まて〳〵。　誓約をせい。（佩劍の欄をさし出だしつゝ）此劍の上に罪人たる其方

たちの手を置け。　神に負ふ所の義務によつて、……予に對する分は追放すると同時に解除して遣はすから、……只今言ひわたすことを必ず履行すると誓約をせい。　正義を重んじ、神を尊信するならば、謫竄中に於て決して相結托し、或は相會見することのないことを誓へ。　また相通信し、相應答して、故國で釀した此意趣意恨のあらしを外國に於て縱まに鎭和せしめるやうなことはせぬと誓へ。　また予に對し、予の尊嚴に對し、予の臣民に對し、予の國土に對して、故意に企圖し、計畫し、共謀するやうなことはせぬと誓へ。

ボリ　誓ひます。

モー　手前とても守ります。

ボリ　（モーブレーに）ノオフォーク、……敵に對して言へるだけのことをいふが……二人の靈魂のどちらかゞ、……王がお許しになつたなら、……今頃は、此脆

い肉の廟を離れて、お互ひが追放されたやうに、空中をうろついてゐる時分だ。　だから、王土を去る前に、叛罪を白狀したらよからう。　荷厄介な罪の重荷なんかは、遠い處へしよつて行かないはうがいゝ。

モー　いゝや、決して。　萬一おれが叛逆人なら、名を生命の書から削つて、こゝから追放されると共に天からも追放されよう！　だが、汝の本來は神が知り、汝が知り、おれが知つてゐる。　おそらく王が程なく後悔なさるだらう。……（王に）陛下、御機嫌よろしう！　さ、どつちへでも行かれる、イギリス以外の世界は、どこだつておれの行手だ。

モーブレー入る。

王　叔父上、あんたの其目の鏡の中に、心の痛みがまざ〳〵と見えてゐる。　あんたの悲しさうな顏色が彼れの追放年限から四年だけを引拔かせました ぞ。（ボリングブルックに）嚴冬が六回過ぎたら、歡迎の故國へ歸つて來るがいゝ。

ボリ　たッた一言に、ま、何といふ長い時日が宿るとだぞ！　のろくさい四たびの冬も、だらしのない四たびの春も、たッた一言で盡きてしまふ。　由來、倫言てものはさうしたものだ。

ガント　手前の爲に伜の追放を四年間お減じ下されまするのは有難く存じまする。併し、手前がその恩惠から刈取りまする利益は、至つて乏しい。　星移り物換つて、追放の六ヶ年が盡きるまでに、この油の切れたランプは、年と共に光りが衰へ、果のない暗と消えるでありませう。　そのうちに手前の餘命の一寸蠟燭は燃え盡くして、死が來て此目を塞ぎませうから、又と伜の顏を見ることは出來ますまい。

王　何の〳〵、まだ〳〵何年も生きておいでゝあらう。

ガント　いゝや、たつた一分の時間だつて、それをあなたが下さることは出來ない。悲ませて手前から晝や夜をお取り上げになることは出來るが、只の一日でも

日をお加へなさることは出來ない。「時」の手傳ひをして手前を老衰させなさることは出來ても、「時」の齎す皺をおとゞめなさることは出來ん。　死なせろとおつしやれば「時」は諾といひます、けれども此國に代へても、死んだ手前をお買ひ戻しになることは出來ません。

王　息子さんを追放したのは十分に協議した上の事ぢや。　さうしてあんたもそれを贊成なすつた筈ぢや。　すれば、此裁決に不服を唱へなさる筈はないぢやァないか？

ガント　舌に旨い物も、不消化なので、惱むことがあります。　判官として嚴命に應じろといふ御沙汰であつたが、父としての意見を述べろとお命じであつたらばと思ひました。　あゝ、あれが伜でなく、他人であつたなら、手前は、もつと寛大に、彼れが罪を輕めるやうに申し做したでありませう。　身晶員といはれまいために、自分を殺すも同然の宣告を下しました。　あゝ〳〵、

實は、だれかゞ、それはあんまり嚴酷に過ぎると言つてくれるだらうと望んでゐました。　ところが、心にもなく申したことを御採用になつたので、自分で自分を害するやうな破目になりました。

王　（ボリングブルックに）從弟よ、機嫌よう。　叔父上、暇乞ひをおさせなさい。……彼れには六年間の追放を命ずる。　立去らせい。

喇叭の聲のうちに、王並びに侍臣ら入る。

オー　（ボリングブルックに）從弟よ、御機嫌よう！　これからは、もう面會して聞くわけにやいかない、行く先きゝから書面で知らせて下さい。

式部　（ボリングブルックに）手前はお暇乞ひはしません、陸つゞきである限りのところまで、騎馬で御同伴しますから。

ガント　（ボリングブルックに）これ、友人たちが挨拶をされるのに返辭もせず、何の爲に言葉を惜むのだ？

ボリ　暇乞ひに言葉を使ひたくありません、心中の苦悶を吐き出すために、舌の役が忙し過ぎるのですから。

ガント　辛いといつたつて、お前のは、たかゞ、一時の不在だ。

ボリ　喜びの不在は悲みの永存です。

ガント　六たびの夏ぐらゐが何だ？　ぢツきに過ぎてしまふ。

ボリ　喜んでゐる者にはね。　けれども悲むわたしには、一時間が十時間です。

ガント　遊興のために旅行をするのだとお思ひなさい。

ボリ　餘儀なくさせられる回國を、そんな風に呼んだなら、此心が情けながります。

ガント　よし漂浪の間は、どのやうに物憂からうとも、其物憂さは寶石の光りを增す臺板だ、後の歸國の樂しさといふ寶石の臺板だ。

ボリ　いゝや、二月二月と憂き旅路を重ねるにつれて、故鄕といふ寶石に、いよいよますく遠ざかるばかりです！　長い年期を入れながら、大陸遍歷をやつと卒業した曉が、煩悶と悲歎の職工になつてゐたに過ぎなからうと思ふと、情けない！

ガント　いやく、天の御眼（太陽）の光る限りの一切の場處は、賢明な者には、良い港であり、避難所である。　窮境ほど結構なものはない。　窮境をしてまア　こんな風に言はせるがいゝ。……王に追放されたとは思はず。王を追放したと思へ。　不幸は、荷ふ力の弱々しい處に、尙と重く居据わる。　或は、今度の旅は、わしの勸めで、立身出世のためにするので、追放ではないとしたら、どうだ？　或は、此イギリスには惡疫のバチルスが群つてゐる、で、それを避けて、空氣の清い處へ行くのだとする。　又は、お前の一等大切に思ふ物は指して行く處にあつて、離れる本國にはないとお思ひなさい。　囀る鳥を音樂者、蹈みしだく艸を葦を敷いた大廣間、木草の花を淑女、貴婦人、蹈み出す足を愉快な舞樂の足取りとも踊ともお思ひなさい。　どんな狂犬のやうな悲みでも、それを馬鹿にして平氣な顏をしてゐると、咬み附き得ないのがきまりだから。

ボリ　あゝ、どんなにコーカサスの雪の山を思ひつゞけて見たからッて、火を手掴みにすることは出來ますまい…　山海の珍味に滿腹したと想像したゞけで、刹るやうな飢さが忍べますか？　或は、夏の暑さを想ひ出して、それで、

嚴冬の雪の中に裸でころがつてゐることが出來ますか？　おゝ、決して！　善いことを豫想すりや、惡いことがいよ〳〵鋭く感ぜられるばかりだ。悲みの齒が與へる苦痛の一等甚しい場合は、その咬んだ劍口にランセッタが徹底しない時です。

ガント　（氣が換へて）さ、さ、伜、そこまで一しよに行かう。わしも年が若くッて、さうしてお前と同じ理由を持つてゐたなら、こゝに留まつてはゐまい。

ポリ　（思入れあつて）ちや、イングランドよ、もうお別れだ。なつかしい土地よ、……今はまだおれをおんぶしてゐてくれるお袋よ、乳母よ！　さやうなら！……これからどこへ漂泊しようと、追放された身であらうと、おれは飽迄も眞のイギリス人たることを誇りとするのだ。

皆入る。

第四場　宮廷

一方よりエがパゴットとグリーンとを連れて出る。　と他方よりオーマールが出る。

エ　（グリーンらに）予もさう思つてゐた。……從弟オーマールよ、どの邊までハーフォードどのを見送つて來ました？

オー　「どの」と仰せられまする其ハーフォードをば、ついそこの本海道まで見送りまして、あそこで別れて參りました。

エ　別れの涙が嘸夥しく灑がれたことであらうの？

オー　手前なぞはねッから。　折柄、面上へきびしく吹きつけました北東の風の爲に、寢ぼけ目の水分が呼び起されて、偶然に別れを惜む空涙の役廻りを

務めましたに過ぎません。

王　別れぎはに從弟はどんなことをいつた？

オー　「御機嫌よう！」と申しました。　が、そんな心にもない言葉を口にするに忍びません手前の心は、言葉が悲歎の墓の中に埋沒いたしたゝめに、さう言はうと欲しながら、言ふ能はざるが如き體を巧みに粧ふことを手前に敎へてくれました。　若し「御機嫌よう！」と申し遣はしさへすれば、彼れの短か過ぎる追放に年數を加へ得ることが出來ますなら、隨分何百たびでも敢て口にするを厭ひませんでしたが、迚もそんな效力はございませんから、よしました。

王　從弟、彼れは予の從弟ぢやが、追放が果てゝ歸國する機會が來た時分に、果して友情を有する近親として歸つて來るかどうかは疑問ぢや。　予もブシーも此バゴットもグリーンも彼れが頻りに卑下して同輩のやうに打解けて平民共に追從をいひ、只の奴隷にも益んに敬意を表するのを見た。　今度のやうな目に逢つても、じつと忍耐し、巧みに微笑を裝つて、追放先きまで彼等の同情を持つてゆかうとするかのやうに、貧乏職人の機嫌をも取れば、蠣を賣る小女にも脫帽する。　嘗て荷車引きが二人で彼れの幸運を祈つたことがあつた、すると忽ち膝をかゞめて「有りがたう、國人よ、愛友よ」と丁寧に感謝した、まるで次期の王位繼承者でもあるかのやうに、さうして國民がもう已にそれを承認してゐるかのやうに。

グリーン　ですが、もう居なくなりました以上、さういふ御心配にも及びますまい。ところで、アイルランドの賊軍の事でございますが、御猶豫遊ばせば遊ばすほど、彼等には便宜となり、陛下の御不利となる次第でございますから、速かに御處分遊ばさねばなりますまい。

王　それは自身で出征しで取鎭めようと思うてをる。　が、宮廷費や恩賞額が

近來甚しく嵩んだため、内帑が空乏となつてをるから、此征討費を調達するには、一時王領の全部を貸與せしめるより外に良策はない。若しそれでも不足であつたら、留守居役の國王代をして無記名の特許狀を發行させよう、さうしてそれへ、富有者を見附け次第、多額の用金調達を命じて、署名させ、軍費の補充として後から送らせることにして、早速アイルランドへ出發しよう。

（ブシー出る。）

ブシー　ブシー、何か起つたか？

王　ガントのジョン老公が俄かに御重態におちいらせられました。只今急使を以て卽刻の御臨御を懇願に及ばれまする。

ブシー　どこにをるんぢや？

王　イリー館においでゝございます。

（半分獨語のやうに）神よ、何とぞ醫師をして彼れをば速かに墓穴へ送る手助けをなさしめたまへ！……彼れが手匣の内の物を以てアイルランド征討の軍費に充てよう。さア〳〵揃つて見舞にゆかう。どうか急いで行つても、それがもう時後れであるやうに！

皆　アーメン！

（皆入る。）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

——幕——

第二幕

第一場　イリー館（ホルボオンに在る監督の邸）

重患のガントのジョンが侍者に介抱されて、其弟のヨオクの公爵と共に出る。

ガント　え、王は來られるだらうかね？　此息を引取る前に、わの無頓著な、輕卒な性根がきつと治るやうに、剛異見をせねばならぬ。

ヨオク　お氣をお揉みなさるな、息が切れるのに、强ひて物を言はうとなさるな。

ガント　どうお諫めなすつたとて、王の耳には入らんのですから。いや〳〵、人の最期の言葉は莊嚴な音樂のやうに傾聽せざるを得ざらしむるといひます。　言葉ずくなに言つたことが無駄になつた例は稀だ。　辛苦してやつと口外する言葉には、必ず眞理が籠るからだ。　けふを限りの者のいふことは、年若な暢氣な者が口にする心にもない世辭よりは傾聽される。　人の臨終は其前生涯よりも注目される。　譬へば、沈まんとする日の光り、終らんとする樂の音なども、食べじまひの美味のやうに、しまひ際ほど快い。　前々のよりもしまひ際のが心に沁みる。　わしの生前の諫めを聽かぬリチャードも、わしの最期の剛異見には耳をふさぐわけにはゆくまい。

ヨオク　いゝや、王の耳は阿諛追從の言葉で塞がつてゐます、賢人も聞きほれる褒言葉や若い者の耳を魅惑するみだりがはしい歌曲の調べや文華に誇るイ

タリーの新流行の報告なんぞで。　常にイタリーの風俗をおそまきに眞似る淺ましい猿に似たわが國民！　どこかの國で、ある新奇な流行がはじまつたと噂されるや否や、どんなに下品な流行でも、それが忽ち王の耳へ吹聽される。　ですから、王の心は常に惑亂して、思慮や分別とは別に働く。何をおつしやつたつて、聽かれることぢやアない。　氣隨氣儘に振舞はうとせらるゝ王に、お指圖なさるのは無駄だ。　そんなに息が切れるのに、此上息を無駄になさるな。

ガント　いや〳〵、わしは新たに靈感を得た豫言者であるやうに思ふ。　だから、死に際に、王のあの向う見ずの亂暴な行爲の、決して安穩には續かないといふことを豫言します。　烈しく燃え立つ火は程なく消える。　小雨は長くつゞくが、暴風雨は短い。　餘りに早く走らせる騎手はまた早く馬を疲らせる。餘りに貪り食すれば食物が胸に閊へる。　虛榮、浮氣は飽くことを知らぬ

鵜だが、其中には餌種が切れて、おのが臍を咬む後悔をするのが定例だ。此累代の王座も、此すめら御國も、此大王土も、此マーズ神のおまし所も、此第二のエデンも、準天國も、惡疫、外寇を防がんとて自然が築いた此砦も、此天福を得たる民の群れ、此小宇宙、害心を抱く敵國に對しては城壁ともなり壕濠ともなる白銀の海を臺板の此寶石、此幸運の土、此地上、此王領、此イングランド、此保母、其品種の故に怖れられ、其血統の故に名高き列代の諸王の牝胎、天惠を得たるメレー女の御子の御墓を頑冥なるジューの國より取戻す其爲に、救世主のおん爲に、まツた騎士道の正義の爲に、遠征したので有名な列代諸王の牝胎、さういふいみじい人達の生れた國、此いみじい〳〵國、世界ぢうに盛名とゞろく此いみじい國も、些末な采邑も同樣に賃貸されるに至つた、と言ひながら死なねばならぬのか！　敵軍を辟易さする荒海に圍まれてゐるイングランドも、峩々たる岩壁を以て寄するネ

ブチューンの水軍を撃ち退くるインングランドも、今は、恥かしや、腐れ羊皮紙に墨黒々としたゝめた貸與證劵で縛られてしまひ、曾て他國に征服せられたことのない此インングランドがおのが手づから征服の恥辱を蒙ると

ヨオク　は！　あゝ、若し此不面目が此命と共に消えるものなら、死をも幸福と思はうものを！

王リチャード、妃イサベラ、ヨオク公の男オーマール、嬖臣ブシー、グリーン、バゴット、ロッス並びにウイロービーらの諸貴族出る。

妃　（ガントに）王が見えました。若い者に對しては穩かに物をおいひなさい。血氣の若駒は、怒らせると、尙荒れるものですから。

王　（ガントに）叔父上、ランカスターどの、お加減はいかゞ？

ガント　どうです、氣分は？　え、老ガント（痩骨）公爵！　おゝ、名詮自稱の其呼び名！　いかにも老痩骨だ、老い衰へて痩せさらばうた此身！　悲しさが胸に滿ちて、長い間物を食ひません。絶食すれば痩せるは當然です。インングランドが眠つてゐるので、氣が氣でなく、始終起きて見張つてゐた。寐ずにゐれば肉が落ちる。肉が落ちたのは痩せたのだ。人の親の最も喜ぶ滋養物は子供らの顏、それを見ることを禁ぜられたのでも身の痩せは加はるばかり。もう墓穴に入るばかりに、骨の外には物をとゞめぬ空洞な墓穴同樣に痩せました。

王　病氣でゐて、よくまアそんな巧い洒落がいへますね？

ガント　いゝや、みじめな身は、自ら嘲つて纔かに慰める。あんたはわしの名を殺さうとしてゐなさるから、それでわざとわが名を嘲弄して御機嫌を取つて見たのです。

王　はてね、死にかゝつてゐる者が生きてゐる者の機嫌を取りますかい？

ガント　いや〳〵、生きてゐる人が死ぬ者の機嫌を取ります。

王　でも、現に死にかゝつてゐるあんたが、わしの機嫌を取るといひなすつたぢやないか？

ガント　おゝ、いや〳〵！　死ぬのはあんただ、もつともわしのはうが重體ではあるが。

王　わしは此通り健康で、現にあんたのわるいのを見てゐる。

ガント　おゝ、自分を造りめされた彼の方こそ知ろしめせ、わしはあんたを惡く見る。　目がわるいからでもあるが、あんたがわるいからである。　あんたは、今、此全國を病床にして、病みほうけた人望を抱いて、臥てゐなさるのだ。さうして其大切な體の療治を、無頓著にも、最初あんたに傷を負はせた其發頭人の藪醫者共に一任して、平氣でゐなさる。　頭より大きくない其王冠の中には、無數の諂諛者や佞人が充滿してゐます。　そんな狹い處に居すくまつてはゐるが、そいつらがあんたの國を食ひつぶしてしまふんだ。

おゝ、あんたのお祖父さん（エドワード三世）に先見の明があつて、其子息（黑太子エドワード）の子息（リチャード王）が、彼れの子息ら（グロースター公其他）を滅すと知つてをられたら、あんたを王位を領させん前に貶黜して、國辱を避けられたであらうものを、今はあんた自身が惡魔に領されて、自分で自分を貶黜しようとしてゐなさる。　はて、甥の殿よ、よしんばお前が全世界の攝政であつたにしても、此國を貸し出すのは恥であらうのに、こゝより外に國がなくてゐて、それを辱めるとは、恥の上塗りといふものだ！　お前はもうイングランド王ではない、只の地主だ。　王であつたお前が、もうこれからは國法の奴隷だ。　お前は……

王　（憤激して）智慧までが痩せた氣ちがひの大馬鹿もの！　瘧の神にでもなつた氣か、冷い、聞きぐるしい似而非諫言を並べ立てゝ、惡寒を覺えさせ、予をして顏色を失はしめるとは不敵千萬ちや。　おゝ、もし其方がエドワード

王の賢太子の實の弟でなかつたなら、此國正統の王者たるの威權によつて、かく其方の面皮を剝ぐ此同じ舌を以て、直ちに其肩の上から其素頭を打落してくれるであらうに！

ガント　おゝ、兄エドワードの倅よ、わしが彼れの父エドワードの倅である故を以て、假借してくれるには及ばん。　お祖父さんの其血をば、ペリカン鳥のやうに、おぬしは既に夥しく絞り取つて、亂醉するほどに飲み乾しをつた。　わしが弟の、あの正直な、善良なグロースターが……幸多き他の靈魂と

共に、願はくは天上にて幸福なれ……よい先例、よい證人だ、エドワードの血を流すのを物とも思はぬのがおぬしの根性。　重病の此老體は萎れかゝつた花同然だ。　此上へおぬしの殘忍が加はれば、「時」の曲り鎌の只一薙ぎ！　恥面さげて、生きてゐをれ！　死んだ後までも、恥を殘しをれ！　わしの此言葉が後々までも苛責であらうぞ！……（侍者に）寐床へつれてつてくれ、それから墓場へ。　愛や名譽を有つてる者だけが生きたがるがいゝ。

侍者に搔き抱かれて入る。

王　老や固意地を有つてる手合は早く死ぬがいゝ。　お前は其二つを有つてゐるのだから、墓場へ行くのが當然ぢや。

ヨオク　彼れが過言は、老病の爲の氣むづかしさとおぼしめされて、お聞き流し下されたい。　彼れは、神以て、あなたを愛してゐます。　よし實子ハーフォードのハーリーが爰にゐませうとも、彼れも同樣にあなたを思つてゐます。

王　なるほど、さうもあらう。ハーフォードの愛情が彼れの愛情。彼等の心がわしの心ぢや。それでいゝ。

ノオサンバランド公爵出る。

ノオ　陛下、ガント公よりのお言傳でございます。

王　何といふた？

ノオ　いや、何とも申されません。もう申し盡されたのです。公の舌は、もう線の無い樂器でございます。言葉も、生命も、もう使ひ盡されました。

ヨオ　（天を仰いで）ヨオクをして續いて生の破産に逢ふ者たらしめたまへ！　死は貧しい者ではあるが、人の世の苦みを絶つてくれる。

王　熟し切つた果物は落ちる。彼れがそれぢや。彼れの生涯は果てたが、われ〳〵の回國はこれからぢや。此事はこれぎり。……さて、アイルランドの征討ぢやが、是非ともあの毛むくじやらの野武士共を討ち平らげてしま

はねばならん。幸ひに他の害蟲はゐなくなつたのに彼等ばかりが害蟲となつて、あの國土を惱ましてをる。ところで、此大事件には費用を要するから、それを助けるために、叔父ガントが所有であつた金銀の皿類や貨幣や其他の動産及び歳入を沒收することにしよう。

ヨオク　（歎息して獨語的に）あゝ、いつまで耐へてゐるのだ？　誠意を致しながら、いつまで不法な目にばかり逢はねばならぬぞ？　グロースターの死も、ハーフォードの追放も、ガントの冷遇も、英國民個々の枉屈も、ボリングブルックに係る結婚の防害も、おのが身の貶辱も、いまだ曾て自分をして此堪忍づよい面上に憤りの色を浮べしめはせなかつたのに！　君主に對して眉根の皺を只一筋でも動かさなんだのに！……（王に）わしはエドワード大王の四男中の末男だ。あんたの父御ウェールス公爵（黑太子）は其長男。戰時には獅子よりも烈しく猛く、平和となつては小羊よりも溫和であつたあの若

い黒太子。　其面附はあんたそのまゝ、あんたの年頃に、もう何事にも練達し、怖い顔をすることはあつても、それは敵のフランス人に對つた時で、身方に怒つた顔を向けたことはなかつた。　彼れが費消した財貨は、悉く戰勝で自ら得たもの、父王が勝利の所得を自儘に費消した例はなかつた。　同族の敵の血をこそ流せ、同胞の血で手を汚したことなぞは曾てなかつた。……おゝ、リチャードどの！　ヨオクは悲歎のあまりに心が亂れたのだ。でなくば、こんな比較はせない筈だ。

と頭をかゝへて煩悶する。

王　叔父上、どうしたのです？

ヨオク　おゝ、陛下、どうぞお赦し下さい。　お赦しなくば、ないで、隨分滿足もしませうが。……あなたは、追放中のハーフォードの王族權をも其他の權利をも、みんなお取りあげなさるのですか？　ガントは死んでも、其嗣のハーフォードは生きてゐますぞ。　ガントは公正な人であつた。　ハーフォードも忠誠の士ではありませんか？　ガントには後繼を許されるだけの功勞があり、さうして其子には、嗣として恥かしくない資格があります。　ハーフォードの權利をお取りあげになるから、同時に、「時」の特權をも殘らずお取りあげになるがいゝ。　さうすれば明日が今日に續いては來なくなるから、あんたがもうあんたでなくなる。　何故なら、時の次第、時の連續があればこそ、あんたが王位に登り得られたのだから。　おゝ！……神よ、照覽あれ！若しあんたがハーフォードの權利を理不盡に沒收なされるやうだと、法規通りの代理人を經て當然受領する筈である特許狀を無效になどなされるやうだと、それこそ自ら求めて無數の災厄を招き、無數の良民の心を失ひ、遂には自分の此やさしい堪忍づよい心にすら、名譽、忠義が掛けても思ひ得ないやうな事を考へしめるに到りませうぞ。

王　あんたがどう考へようと、ガントの財寶や貨幣や領地は悉く沒收します。

ヨオク　（歎息して）ちや、其間、こゝを避けませう。……陛下、さやうなら。……あゝ、續いて何事が起るか、だれがそれを豫言し得よう？　やり方がわるい。　結果のよい筈はない。

ヨオク入る。

王　ブシーよ、すぐさまウィルトシャヤ伯爵のところへ往つて、用があるから、イリー館まで參れと傳へてくれ。　明後日はアイルランドへ立たう。　もう猶豫は出來ん。　それから、予が不在中は、叔父ヨオクをイングランドの統監職に任じよう、彼れは正しい仁で、常に予を愛してゐてくれたのぢやから。……さ、さ、妃、明日は別れねばならん。　陽氣になさい。　かうしてゐるのは、もうほんの暫時ぢや。

喇叭鳴る。　王、妃、オーマール、ブシー、グリーン、バゴット入る。

ノオ　時に、諸卿、ランカスター公爵はなくなられましたぞ。

ロッス　まだ生てをられるともいへます。　息子さんが公爵になられたわけですから。

ウィロ　呼び名の上だけで、收入はなしでせう。

ノオ　いや、双方ともでせう、正義が行はれゝば。

ロッス　わたしは胸が一ぱいです。　併し默つてゐるために此胸が裂けようとも、いひたいことをいふわけにはいかん。

ノオ　何の！　おいひなさいよ。　君の言つたことを持ちあるいて、君に迷惑を掛けるやうな者には二度と物をいはせなけりやいゝ。

ウィ　君の言はうとすることは、ハーフォードに關したことですか？　若しさうなら、大膽にいつてのけたまへ。　あの人の爲になることなら、早く聞きたい。

ロッス　どうあの人の爲になることも、わたしには出來ない、世襲財産を褫奪されてしまはれたのを只氣の毒だと思ふ以上に。

ノオ　あゝ、神以て大恥辱だ、國が亡びかけてゐるのに、こんな不法な目に逢ひながら、王統であり名門である彼れが平氣でゐるのは。　王は本心を失つて、嬖人共のいふまゝになつておいでなさるから、あいつらに睨まれたりといふと、われ〳〵は其告げ口次第で、自分も子供も世繼ぎの者も、王の嚴命で忽ち死刑にされッちまふ。

ロッス　重税を取り立てゝは、悉く平民共の心を失はれるし、貴族連には舊い反抗を理由にして罰金を課して、彼等の人望をもなくされる。

ウィロ　なほ其上に、おつかけ〳〵無記名だの、獻納だの、其他いろ〳〵の名義で、新しい取り立て方の工夫ばかり凝らされる。　一體全體、何に使はれるのか？

ノオ　戰爭のためにではない。　王は戰爭はせられたことはない。　いや、卑劣にも妥協して、御先祖が立派に戰つて獲られたものを、おめ〳〵敵國へ引渡してしまはれた。　戰爭に使用されたよりも、平和の時に費されたはうが多い。

ロッス　ウィルトシャヤ伯は王領を歩合で借用してゐますぞ。

ウィロ　王は破産者同様です。　もう身代限りです。

ノオ　非難と破滅が王の頭の上へ落ちかゝつてゐる。

ロッス　重税政策を取られたにも拘らず、アイルランド征討の軍費が足りないので、例の追放公爵のを褫奪されることになつたのです。

ノオ　あの立派な近親者を。　見下げはてた王だ！……諸君、もう大あらしが唸りはじめてゐるのに、われ〳〵は、どこへそれを避けようともしてゐない。もう帆に吹き附けてゐるのに、それを下さうともしないでゐるのは、この

まゝ泰然として死ぬつもりかね？

ロッス　難破をまぬかれないのは見えてゐる。もうかうなつては、到底避けられないよ、危險の近づくのをついうつかりしてゐたのだから。

イオ　いゝや、さうでない。「死」の空洞な目穴の中に、「生」の影が微かに見えてゐる。もつとも、それがどのくらゐ確實だかは、今はまだ斷言は出來ませんがね。

ウィロ　いや、君のそのお考へを聞かせて下さい、わたしたちのは話したのだから。

ロッス　ノオサンバランド、安心して話して下さい。われ〳〵三人は君と同心一體です。口外なすつたとて、腹の中で思つてゐなさるのと同じです。だから、大膽に。

ノオ　ぢや、斯うです。實は、ブリタニーの港ル・ポール・ブランクから、かういふ報道を受け取りました。すなはち、パーフォード公パーリー、レインノ

ルド・ロオト・コブハム、近頃エキシター公爵から絶縁せられたアランデル伯リチャードの子息、其舍弟、カンタベリーの前の大監督、士爵トマス・アーピンガム、士爵ジョン・ラムストン、士爵ジョン・ノオバリー、士爵ロバート・ウォータートン及びフランシス・クオイント、すべて是等の人々が、ブリタニ公爵の後援によつて、大軍艦八隻、兵士三千人をひきゐ、出來る限りの大急ぎで船を進め、程なくわが北海岸に著達しようとしてゐるといふ報道であります。多分もう著いたでもありませう、或は王がアイルランドへ出發さるゝまで差控へてゐるかも知れませんが。だから、若し諸君にして奴隷の軛を振り落し、死にかけた國の破れた翼をつゞくり、汚れた王冠を質店から受け戻し、王梃の金色の埃を拭ひ、此王國を王國らしく見せたいと思ふ心があるなら、大急ぎでわたしと一しよに、レーヴンスバールまでおいでなさい。けれども勇氣がなくッて、さうすることを恐れる人達は、

こにに留まつて、默つておいでなさい。　わたしは往きます。

ロッス　（突ッ立ちあがつて）馬を、馬を！……恐れる手合は疑はしい手合だといつていい。

ウィロ　馬がひッこたへさへすりや、きつと眞先に着到して見せる。

皆入る。

第二場　ウィンゾア城

妃イサベラ、嬖臣ブシー及びバゴットで出る。

ブシ　陛下、あんまりおふさぎ遊ばしてばかりいらせられます。　王とお別れの際に、ふさいでゐると、體にさはるから、陽氣に氣を持てとおほせられたではございませんか？

妃　王の心安めのためには、あゝもいひましたが、自身のためには、どうもなりません。　けれども、なぜこんな厭はしい心持を、なつかしい夫リチャードを送り出したことの外に呼び迎へねばならんわけがあるかは、わが身ながら分りません。　或は、何か思ひがけない不幸が……運命の胎内から今にも生れる或悲みが……身に迫つてゐるために、それで此靈魂の奥底が自づと慄へ戰くのではないかとも思ひます。　王に別れた爲といふことの外に、靈魂が何事かを歎くのです。

ブシ　悲みの本體は只一つでありましても、影が二十にも分れて、それが皆悲みと見えることもございます。　畢竟、悲む目は涙でくらんでをりますから、一つの物が幾つにも見えるのです。　ちやうど、あの斜視正形畫を、眞直に

見ましては、只もう混亂したものが見えますばかりですが、斜に見ますと、はじめて判然した形が現れますやうなもので。　陛下も、王陛下の御出發を斜に御覽遊ばしますので、それで實際以上にお歎き遊ばすやうなお悲みの姿が現れるのでございます。　それを本體通りに御覽になれば、有りもせぬ空な影ばかりなのでございます。　陛下、此上はお歎き遊ばすとも、御出發以上のお悲みはないものとおぼしめしませ。　よい有りましても、それはお悲みの空目で、本物でない空な物を御覽になつてゐるのでございます。

妃　さうかも知れません。　けれどもわたしの靈魂の奥では、どうもさうらしくないといつてゐます。　しかしどちらが本當でおらうと、悲まないわけにはいかない。　たへられなく氣がふさぎます。　何にも考へないでゐても、空な、わけのわからない悲しさにおさへつけられて、身がちゞみ、息が

ブシ　切れるやうに思ひます。

妃　それは全く御空想に過ぎませんのです。

ブシ　いゝえ、空想ではありません。　空想は或過去の悲みから生れるものです。　わたしのはさうでない。　なぜなら、わたしの此物々しい悲みは、何物もない處から生れたのですから。　あるひは、わたしの悲しがる此空な物には、何かしつかりした物があるといつてもよい。　今はまだ持つてゐないが、やがては持つので

あるらしい。けれどもそれが何であるかは分らない。名ざすことは出來ない。名のない悲みです。

（グリーン出る。）

グリン　神、陛下を守りたまへ！……（ヂシーらに）お目にかゝつて仕合せです。王はよもやまだアイルランドへ御出發ではありますまいね。

妃　（聞き咎めて）よもやとおいひなのは？　出發せられたのを心配さうに。一日も早くと計畫してをられたのだから、一日も早く出發せられるのがよいぢやないかい？　どういふわけで、心配さうに「よもや」とおいひなのです？

グリン　御出發にさへならなければ、どんな强敵が攻め寄せましても、よもやお國が危怡に瀕するやうなことはあるまいと信ずるからであります。其敵は已に大軍をひきゐて上陸いたしました。追放のボリングブルックが舞ひ戻り、叛旗を翻して、レーヴンスパールへもう既に安著しました。

妃　おゝ、天の神よ、なにとぞ禁じたまへ！（そんなことがあつてなるものか！）

グリン　いゝえ、全くでございます。まだ其上に、ノオサンバランド卿、其子息ヘンリー・パーシー、ロッス、ボーモント、ウィロービーの諸卿が、おの〳〵其强兵をひきゐて、ボリングブルック方へ脫走に及びました。

ブシ　なぜノオサンバランド其他の謀叛人共をすぐに逆賊として公宣なさらなんだのです？

グリン　公宣しましたのです。さういたすと、ウーセスター伯は其職梃を打折つて、王室附執事たる現職を拋ちました。すると王室附きの役人共は擧つて彼れと共にボリングブルック方へ走りました。

妃　グリーンよ、お前は生れかけてゐたわたしの悲みの產婆役を務めてくれました。それでボリングブルックといふ悲みの後繼が生れました。かうい

ふ鬼子が生れた以上、産褥に喘ぐ母親の心には、いやが上に、愁ひや悲みが積るばかりです。

と泣く。

ブシ　そんなに御絶望遊ばしちやいけません。

妃　いゝえ、絶望します。もう望みはありません。あるといふのは僞りです。僞る望みをわたしは憎みます。望みはわたしを騙して、最期の際まで生かして引きずつてゆかうとする、その絆を釋いてくれるものが死です。其死を妨げる者は追從者です、諂諛者です、佞人です。

と泣く。

ヨオク公甲冑姿にて出る。

グリン　ヨオク公が見えました。

妃　おゝ、年寄りの胸に軍の徽章を附けて。いかにも心配さうなあの顏附！

ヨオク　……叔父上、どうぞ慰めになることを聞かせて下さい。

さやういたすと、僞りを申し上げることになります。慰めは、只天にあります。下界にゐるわれ〳〵には、失望や苦勞や悲歎があるばかりです。おつれあひは國を益せんために遠征せられましたが、其隙に御損をさせる敵が御本國へやつて來ました。其御本國を支へる役の自分は、老衰して意氣地がなく、一身を支へることさへ覺束ないのです。あゝ、今こそ飽食の報いとして病患が來たのです。今こそ追從ばかり申してゐた嬖人らを御試驗なさるべき時が來たのです。

一從者出る。

從者　（ヨオクに）御前、御子息樣は、手前が參りませんうちに、もうお立ちになりました。

ヨオク　立つたか？……しかたがない！　めい〳〵に好きなはうへ行くがいゝ。：

…貴族連は脱走する、平民共は冷然としてゐるが、恐らくハーフォードに身方して、背叛するであらう。(従者に)こら、ブラッシーへ往つて、妹のグロースターの處へ往つて、すぐ一千ポンドを送つてよこすやうに傳へてくれ。……まて、此指輪を取れ。

従者　つい、お話申しますのを忘れてをりましたが、今日こちらへ伺ひますついでに、已にお見舞して參りましたのです、が、それ以上をお知らせしましたら、お歎ぎ遊ばしませう。

ヨオク　えッ！　といふのは？

従者　伺ひました前に、もうお亡くなりになりましたのです。

ヨオク　(歎息して)南無大慈大悲の神！　何といふ重ね〳〵の不仕合せが、此不仕合せな國へ、まるで潮のやうに一時に寄せてくることだぞ！　どうしたらいゝか分らん。　若しわしの不忠がもとで斯ういふ天譴を招いたのでなかつたなら、いつそ王の爲に、弟と一しよに首を斬られてしまひたかつた。……え、アイルランドへ早飛脚が送られたとは聞かなかつたか？……此戰爭の費用はどうしたらよからう？……(妃に)さ、さ、妹……いや、姪御だつけ……お赦し下さい。(従者に)こら、汝はすぐ歸つて、荷車の用意をして、邸にある鎧を持つて來い。

従者入る。

諸君、あなたゝち、兵を徵集して下さるまいか？　此事件を、突然めちやくちやに持込まれた此事件を、どういふ風に處分していゝか、それをわしが知つてゐる筈がない。　兩方ともわしの近親だ。　一方は君主だ、誓約上からも、義務からも、守護しなけりやならん君主だ。　他の方とても、やつぱり親族である上に、彼れに對する王の所置が不法である以上、德義上、肩を持つてやらねばならん。　ともかくも何とかせにやならん。……姪御よ、先

づ、ともかくもあなたを。（と妃を促して席を離れさせながら）諸君、兵士を徵集して、すぐにバークリーでわしと一しよになつて下さい。……ブラッシーへも往かねばならんが……とてもその時間はあるまい。　あゝ、すべてが混亂だ、何もかもめッちやくちやだ。

ヨオク公と妃と入る。

ブシ　アイルランドへ報告に參るには、ちやうど順風なのだが、まだ誰れも歸つては來ません。　兵を徵集せよといはれたつて、敵軍に匹敵するだけをわれ〳〵の手で集めることは到底不可能です。

グリン　それに、われ〳〵は王の嬖人だといふので、王を大事がらん者共には睨まれてゐます。

バゴ　といふのは、氣まぐれな平民共の事でせう。　彼等の大事がるものは財寶です。　だから、彼等の財寶を多く取立てれば取立てるほど、彼等の憎みを

買ひます。

ブシ　そこで王が一般の者から怨まれ憎まれておいでになる。

バゴ　裁く權力が彼等の手に在るとすると、われ〳〵も彼等の手に在るわけです、王と同腹と見られてゐるのですから。

グリン　ねえ、わたしはこれからすぐにブリストル城へ隱れようと思ふ。　ウィルトシャヤ伯は、もうあそこへ往つてゐる筈です。

ブシ　わたしも一しよに往かう。　憎惡に充ちてゐる平民共は、たかゞ、狂犬のやうに咬み附いて、われ〳〵をずた〳〵に引裂く以上に、奉公をしてくれさうにもないから。……（バゴットに）一しよに往きませんか？

バゴ　いゝや、わたしはアイルランドの王の御許へ參ります。……御機嫌よう！　若し心の豫察が誤らなけりや、三人がけふ別れたら、もう二度とは會へますまいぞ。

ブシ　それは、ヨオク公がボリングブルックに勝つか勝たんかに因ることです。

グリン　あゝ、氣の毒な公爵！　公のしようとしてゐる仕事は、濱の眞砂を算へるのであり、大洋の水を飲み乾すのである。　彼れに從いて戰ふ者一人に對して脫走する者が數千人の割だらう。　さやうなら、諸君、これが永久のお別れだ。

ブシ　さア、まだ會へるかも知れない。

バゴ　いゝや、恐らく決して。

皆入る。

第三場　グロースターシャヤの荒蕪地

ボリングブルックとノオサンベランドが兵をひきゐて出る。

ボリ　こゝからバーククーまでは、どのくらゐあります？

ノオ　さア、手前は、實際、このグロースターシャヤの地理は、全く不案內でございます。　荒れ果てた山々の歩きにくい凸凹路が一段と里數を長びかせて、疲勞を覺えさせまするところを、途々面白いお話をうけたまはりましたので、恰も砂糖によつて辛い進軍を慰めると同樣の愉快を得ました。　が、ロッスやウィロービーに於ては、レーヴンスバールからコストヲルドまでの進軍に艱難いたしてをるでありませう、あなたと御一しよでないために。手前は、おかげを持ちまして、此長道中の退屈を非常に紛らすことを得ました。　が、彼等とても、手前が既に有する其同じ恩惠をやがて頂戴する望みによつて慰められませう、喜びを得べき望みは、逐げられた望みに比べて、其喜ばしさは、殆ど劣らないのでありますから。　さう心得て、疲れ果てた彼等諸卿も、遠路を短く思ふでありませう、ちやうど、手前が現にお傍

にゐて、喜びを得て、さう感じましたやうに。

ポリ　いや、わたしが一しよにゐたとて、さう賞美されるほどの直打はあるまいて。……だれか來た。

ノオサンバランドの男ヘンリー・バーシー出る。

ノオ　あれは倅ハーリー・バーシーでございます。どこから參りましたにせい、舍弟ウーセスターの口上を持つて來たのでございませう。……ハーリー、叔父はどうしてゐる？

バー　父上、わたくしは、それを貴下からうけたまる積りでした。

ノオ　おや、お妃と一しよではないのか？

バー　いゝえ、一しよぢやありません。叔父さんは朝廷をお捨てなすつたのです。職梃をも折り、王室附きの役人をみんな解散させておしまひでした。

ノオ　そりやどういふわけだ？　先きだつて會つた時分には、そんな決心はしてゐなかつたのに。

バー　父上が叛逆人として公宣せられなすつたからです。とにかく、叔父さんは、バーフォード公に奉仕するために、レーヴンスバールへ往かれました。さうして、わたくしにバークリー城を經由させて、凡そどのくらゐの兵をヨオク公があそこで徵集し得たかを見て、それからレーヴンスバールへ來いといふお吩咐でした。

ノオ　バーフォード公爵をお見忘れ申したか？

バー　いゝえ、忘れやしません。てんで記えてゐなかつたものを忘れる筈はありませんから。わたくしはつひぞあの人を見知つた記えはありません。

ノオ　ぢや、今お見知り申すがいゝ。……あれが公爵だ。

バー　（跪いて）閣下、これからお仕へします。まだ未熟で弱輩ですからお仕ひ道がないかも知れませんが、其うちには、段々成熟して、幾らかお役に立つや

うになりませう。

ボリ　バーシーさん、ありがたう。　實際、内心に、良友を得たと記憶することはど嬉しいことはない。　あんたの愛と共にわたしの好運が熟したなら、常に其愛に報いることを心掛けるであらう。　この契約は、わたしが衷心からすることだが、それを斯う此手を以て調印しますぞ。

と握手する。

ノオ　(バーシーに)バークリーまではどのくらゐある？　ヨオク公は軍隊をひきゐて、あそこでどんな手配りをしてゐるのだ？

パー　噂では、あそこには、あの森の附近に城があつて、そこに兵が三百ほど籠つてゐるさうです。　其城内にはヨオク公とバークリー卿とセイモーア卿がをられるッきりで、其他には名ある人はゐないと聞きました。

此時、ロッスとウィロービーと出る。

ノオ　ロッス卿とウィロービー卿が見えました。　拍車には血が附いてゐる、急いだと見えて、顔が火のやうに赤い。

ボリ　(二人を迎へて)ようこそ。　深い友情を有せらるればこそ、刑餘の追放人をおつかけて來て下さるのであらう。　今は自分の倉庫に無形の感謝しかありませんが、早晩それが充實する時が來れば、改めて兩君の友情と功勞に報いすることが出來るでありませう。

ロッス　閣下に侍するを得ましたのが、われ〳〵の爲には、財を得たのであります。

ウィロ　それだけで既に十二分の御報償でございます。

ボリ　ありがたう！　貧者の財政では、いつもお報いは「ありがたう」です。　自分の幼い好運が丁年に達しないうちは、言葉を以てお報いをするより外に爲方がない。……　來たのはだれだらう？

バークリー出る。

ノオ　バークリー卿のやうです。

バー　ハーフォード公閣下、閣下へのお使者でございます。

ボリ　いや、ランカスターとお呼び下さい。　其稱號を得んためにこそ此イングランドへ參つたのですから、お言葉に答へるに先きだつて、其稱號を貴下の口からうけたまはりたい。

バー　誤解なされてはいけません。　御稱號の只の一片たりとも、御名譽から削り取らうなどとは思つちやをりません。　御稱號の何たるに拘らず、とにかく閣下へ申し入れよといふ命を受けて參りました。……此國の攝政、ヨオク老公申されまする、國王不在の機に乘じて、私の爲に兵を起して、祖國を脅されまする御趣意をうけたまはりまゐれとの事にございます。

此時、ヨオク公が從兵をしたがへて出る。

ボリ　あんたを經て其御返辭を傳へるまでもなからう。　あそこへ公自身が見えた。

（進んで跪いて）叔父上樣！

と敬禮をする。

ヨオク　（それを排斥する科介をして）心の謙遜を見せて下さい、膝だけの敬意には、とかく虛僞が多い。

ボリ　おゝ、叔父上閣下！

と更に恭しく敬禮をする。ヨオクは苦々しげにそれを排して

ヨオク　えゝ、馬鹿にするな！……閣下扱ひ、叔父扱ひ、よしてくれ。　おれは謀叛人の叔父ではない。　閣下といふ尊稱も汚らはしい口から出れば、尊稱にはならん。　やい、何のために、其追放された禁制の脚を、此イギリスの內地へは蹈み込ませた？　まだある。　何の爲に、此平和の國內を數十里進軍し、ゆゝしき武裝、劍戟を見せびらかし、行く先きぐの村々をおびやかし、

住民に色を失はしめた？　正統の國王が不在だと聞いてやつて來たのか？

馬鹿な奴！　王は不在ではないぞ。　王の實權は、おれの此忠義の胸の中に存在してゐる。　あゝ、若しおれがおのしの父のあの勇敢なガントと共に、黒太子をば、あの人間のマーズ神をば、數千人のフランス軍中から救ひ出した時のやうな、あゝいふ血氣盛りであつたなら、おゝ、此おれの腕が……今は麻痺して役に立たん此腕が……忽ち汝を打懲らして、此不埒を嚴罰してくれるであ

らうに！

ボリ　叔父上さま、わたしを不埒だとお叱りになる其理由をおつしやつて下さい。　何が不埒なのですか？

ヨオク　不埒も不埒、最も酷い不埒だ。　甚しい大反逆だ、憎むべき大謀叛だ。　おのしは追放人だのに、其期限の切れんうちに、兵をひきゐて戻つて來て、君王に刃向ひ奉る。

ボリ　追放された際には わたしはハーフォード でした。　今はランカスターの世嗣として歸つて來ましたのです。　叔父上、どうか公平なお目で以て、わたしの蒙つた甚しい枉屈や損害を御覽なすつて下さい。　あなたはわたしのお父さんです、あなたにお目にかゝると、老父ガントがまだ生きてゐるやうに思ひます。　おゝ、お父さん、あなたは平氣で見てゐるんですか、わたしが世界無籍の浮浪人と宣告されて、王族權をも相續權をも無理無體にも

ぎとられて、而もそれを成り上りの、あの放蕩な嬖人共にくれてやられてしまつたのを？　わたしは何のために生れて來たのだ？　從弟がイギリスの王であるなら、わたしがランカスターの公爵であるのは當り前です。あなたにも息子がある……わたしの愛敬するオーマール。　あなたが先きに死んで、若し彼れが斯ういふ風に蹈み倒されたなら、彼れはきつと叔父のガントを父とも賴んで、非道な奴等を脅し、奴等を窮地におとしいれないぢやアおかないでせう。　わたしの手には特許狀があるから、それで、正當な引渡しを要求するのです。　然るにそれが拒絶された上に、父の遺產は悉く差押へられ、賣却される。　何もかも悉く不法に使用されるのです。

え　どうしろとおつしやるのです？　わたしは臣民ですから、國法通りを要求するのです。　ところが、法定代理を使用することをさへ拒否されますから、餘儀なく自身で正當の遺產を要求するのです。

ノオ　（ヨオクに）公爵は、餘りといへば、酷いお扱ひをお受けになりましたのです。

ロッス　此矯正は閣下の御任務だと考へます。

ウィロ　下劣なともがらが、公爵の財產で出世をして、權力を得てをります。

ヨオク　（思入れあつて）イングランドの貴族たちよ、では言ひますが、自分とても甥の枉屈を氣の毒と思はんではありません、其矯正のためにも出來るだけの努力はしました。　しかし、かやうに劍戟をひらめかして、自分で其進路を切り開かうとするのは、邪を以て正を得んとするので、許さるまじきことであるのだ。　隨つて、此やり方を奬勵なさる諸君は、叛逆の養成者であり、謀叛人であります。

ノオ　いや、公爵の今度の御歸國は、ひとへに御自分の權利だけを恢復なさらうためであるといふ御誓言であります。で、われ〳〵は其御正義を飽迄もお助け申さうと堅く誓つたのであります。（嚴格に）苟も其誓ひを破らん者は長

ヨオク　永に幸運の日を見ること勿れ！　此戰爭の結果は見えてゐる。　白狀します（歎息して）あゝ、是非に及ばん。　自分の權力が微弱な上に、何それをわたしの力でどうするとも出來ん。　が、若し力が及ぶものなら、神明の加護にもかも不足だらけの留守居役。

ボリ　よつて、君たち一同を面縛して、憐みを王の膝下に乞はしめなけりやおかんであらうが、それが出來ん以上は、是非がない、わたしは中立の態度を取ります。……では、お別れします。　或ひは今夜入城して、城内で休息なさるか？

ヨオク　その御好意は喜んで頂戴します。　ですが、もう一つお願ひしたいのは、ブリストル城まで一しよに往つていたゞきたいことです。　あそこには、ブシー、バゴット及び其他の與黨が、すなはち、わたしが是非根絶すべく誓つた國家の毛蟲共が立籠つてをると聞きましたから。

ヨオク　さア、一しよにいつてもいゝ。　けれども、いや、それはよさう。　國法を破ることはいやだ。　身方としてでも、敵としてでもなく、君たちを迎へるのだ。　もう療治の屆かんものは、わしに取つては、もはや心配に及ばんことだ。

皆入る。

第四場　ウェールスの陣營

ソリスベリー伯爵とウェールスの一隊長と出る。

隊長　ソリスベリー閣下、手前共は、もう十日間滯留しまして、召集した國の者共をやつと取纏めてをりましたが、王からまだにお沙汰がございません

から、もう解散いたします。　さやうなら。

會釋して往きかける。

ソリス　もう一日だけ見合せてくれ。　王はお前を悉く御信任になつてゐるのだから。

隊長　いや、王はお亡くなりになつたといふことです。　もう待ちますまい。　國ぢうの月桂樹は枯れますし、天には光り物が飛んで、恒星を脅します。　不素は蒼白い月が血のやうな色をして見おろしますし、痩せッ面の豫言者は、今にも怖ろしい異變があるやうにいひます。　富豪は、持つてる物をなくするのを恐れて、心配顔をする。無賴漢は、どさくさ紛れにうまい事が出來ると喜んで、躍り跳ねる。　みんな王や君主の滅亡の前兆です。　さやうなら。　國の者はみんな逃げてしまひました。リチャード王はきつとお亡くなりだと信じて。

隊長入る。

ソリス　（歎息して）あゝ、リチャード王よ、わたしは、悲む此心の目で、あなたの榮光が、流星のやうに、久堅の大空からいやしい地上へ墜ちるのを見る。　あなたは西の空に低くなつて、泣き〳〵沈んでゆく太陽だ、近づくあらしの、悲みの、紛亂の前表となつて。　お身方は敵方へ脫走する、運命は悉くあなたの不利となる。

入る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第三幕

第一場　ブリストル　城の前

ボリングブルック、ヨオク公、ノオサンバランド、ロッス、バーシー、ウィローピー出る。ブシーとグリーンが捕虜となつて出る。

ボリ　兩人をこゝへ……。

ブシーとグリーンが前へ引き出される。

ブシー並びにグリーン、予は其方共の舊惡を除り手嚴しく譴責しようとは思はん、程なく肉體を離れる靈魂を苦めるのは無仁であらうから。しか

しながら其方共を死に處するのが私怨でないのを明かにするために、衆人の面前で、死刑の理由を申し聞かすぞ。…　其方共は、血統、風采、共に幸ゆたかに享受しをられた立派な君主の心を、其王の心を惑亂し、悉く不幸な、醜き身とならせ申した上に、剩へ淫蕩を勸めて、おのづと妃との仲を裂き、妃をして空閨を守る悲歎の涙に、其麗しき双頰の艶色を失はしむるに至つたるが如き、是れ將た其方共の惡行の然らしめたのである。……予は、其血統上よりいへば王族であつて、王の親愛を得てゐたのである。然るに其方共の讒言の爲に寃枉の咎めを蒙つて、頸をこゞめて外國に赴き、見も知らぬ土の雲霧にむせんで長歎し、追放の苦を味つたこと幾年月。其間に其方共はわが領地を沒收し、わが遊園を破却し、わが山林を濫伐し、わが窓の飾章を、わが家の紋章を跡形もなく削り去り、予をして、世人の判斷と自己の生血以外には、紳士たることを世に證明すべき何物をも有せざるに至

らしめた。是等の罪狀まつた之に二倍三倍せる重々の罪科あるため、其方共を死刑に處する。……（侍者に向つて）死刑執行係りへ彼等を引渡せ。

ブシー　（平然として）ボリングブルックを此イギリスへ迎へるよりは、自分はむしろ死を歡迎する。……（衆貴族に）諸君、さやうなら。

グリン　（同じく沈著に）天はわれ〳〵の靈魂をお迎へ下さると同時に、不正のともがらを地獄へ落してお罰しなさると思ふと、自ら慰むるに足る。

ボリ　ノオサンバランド卿、彼等を始末させて下さい。

ノオサンバランド、外二三人で二人を引き立てゝ入る。

（ヨオクに）叔父上、妃はあなたのお邸においでだとおつしやつたね。どうか十分懇ろにわたしの願意をお傳へ下されたい、飽迄も好意を有してゐることをおつしやつて下さい。わたしの此口上を、特に御注意あつて、お傳へ下さるやうに。

ヨオク　いや、わしの家來の然るべき者に、其好意の次第をくはしくしたゝめた書面を持たせて、既に差し遣はしたぞ。

ボリ　ありがたうございます。……さ、諸卿、すぐさまグレンダワー一黨の者と一戰に及びませう。……當分は勞働、それがすめば休日。

皆入る。

第二場　ウェールスの海岸　向うに城が見える。

軍鼓。喇叭。軍旗。こゝへ王リチャードがカーライルの監督、オーマール並びに兵士らと共に出る。

王　あの間近に見えるのがバークローリーとやらいふ城か？

オー　さやうでございます。　御上陸になつて、嘸よいお心持でいらせられませう、浪が荒くて、至つて難儀な御航海でございましたから。

王　全くよい氣持ぢやといはんけりやならん。　再びわが王國に足を入れ得たと思ふと、嬉し涙が零れる。　なつかしい國土よ、おれはお前を手で撫でゝやる、謀叛人の馬の蹄に掛けられたお前を。　永く別れてゐた親が其子に泣くやら笑ふやらするやうに、おれも、涙と微笑とを以て、お前に挨拶をして、王の手づから恩寵を與へるぞ。　やさしい國土よ、お前の君主の敵に糧食を與へるな。　彼等の貪慾な口腹に美味を供す

るな。　否、むしろ土中の毒液を吸ひためてゐる蜘蛛やあの不恰好な蝦蟆を道傍に横たはらせて、簒奪の歩並を揃へてお前の面を蹈みにじるあの逆賊共の足を苦めてやれ。　あいつらには刺だらけの蕁麻を投げつけてやれ。　さうして若しお前の胸から美しい花を引きぬかうとしたら、そこに毒蛇をひそませておいて、其二重の毒舌の力でお前の君主の仇敵に死を投げつけてやれ。……諸卿よ、非情の者へのわしの此祈りをお笑ひなさるな。土も同情し、石も甲兵となつて立ちあがるであらう、其祖國の王が逆賊のために打從へられようとするのを見たなら。

カーラ　御心配遊ばすな。　あなたを王となされたは神の御意でありまする以上、是非とも神が守らせられまする。　天の與ふる方策は、必ず怠らず奉ぜねばなりません。　天欲するに、われ〳〵欲せずんば、是れ天の助けを自ら抛つのでございます。

オー　御前、彼れは、われ〳〵を怠慢過ぎると申すのです。油斷いたしてをる間に、ボリングブルックが、物質的にも又兵力に於ても、強大と相成ると申すのです。

王　（オーマールに）お前は不快なことをいふ！　お前は知らんか、下界の照魔鏡たる天の眼（太陽）が地球の向う側へ隱れると、强窃盗が横行して人殺し其他の殘虐を行ふが、一旦、此地球の下から彼れが東山の亭々たる松の梢を輝かし、罪惡のあらゆる巢窟に其光明を射込む時は、虐殺、謀叛、其他の醜類一同が夜の衣を剝ぎとられて、赤裸となつて慄へ戰くといふことを、お前は知らんか？　ちやうど其通りに、あのボリングブルックといふ盗賊、謀叛人も、予が對蹠人と共にぶらゝいてゐた間は、國の夜だから、飲んだり騒いだりもしてゐたのぢやが、一たび予が立ちあがるのを見たならば、其旭光し辟易して、叛逆の罪に恥ぢ、怖れ慄へ、戰くであらう。　いかな荒海の浪

を盡しても正系の王の身から聖油を洗ひ落すことは出來ん。　神のお選びになつた御代理を人間の宣告で廢黜することは出來ん。　わが此王冠に刃向ふためにボリングブルックが徵集した各一兵に對して、神は此リチャードのために、榮光かゞやく一はしらづゝの天使をお備ひ下される。　天使がお戰ひになれば、弱い人間が負けるのは當り前ぢや、天は常に正義をお守りになるから。……

ソリス、ベリー伯出る。

ソリス　おゝ、ようこそ。（不審さうにながめて）あんたの兵士はどこにをるんぢや？　陛下、どこにもをりません、手前一人の外には。　憂愁を案内者といたす手前の舌は、絶望といふこと以外には何事をも申し上げかねまする。　お著が一日おくれましたゝめ、陛下の御好運の陽が曇りました。　おゝ、去つた時を歸らせ、きのふをお呼び戻しなされませ、さすれば一萬二千人の兵士

がお手元にございます。　今となつては、時おくれの今日となつては、もうお喜びもお身方も御好運も御威權も、何もかもございません。　と申すのは、陛下はお亡くなりになつたと聞き傳へて、ウェールス人共はちり〴〵ばら〴〵、或ひはボリングブルックに降參し、或ひはいづこへか立去りましたからでございます。

王は落膽して煩悶する。

オー　(慰めて)もし〳〵、御前。　ま、どうしてそんなに、眞蒼なお顏に?

王　今がたまでは、一萬二千の、血氣壯んな兵が手にあるとばかり誇つてゐたから、此顏が赤かつたのぢやが、それが逃げたと聞いた以上、それが戻つて來んうちは、血の氣がなくなるのも無理はなからう。　助かりたい者は、みんな逃げい。　おれの誇りが汚され辱められねばならん時が來た!

と取亂して默く。

オー　まア〳〵……　御身分柄を御反省遊ばせ。　もし〳〵。

王　(やつと我れに返つて)つい我れを忘れた。　おれは王ではないか?　えゝ、目を覺せ、おのれ、王の臆病者!　眠つてゐる時ぢやアない。　王といふ名は、少くとも一萬二千人に匹敵する。　奮起せい、わが名よ、奮起せい!　取るにも足らん臣下めがお前の大榮譽を毀けうとしてをるぞ。……(貴族らに)お前たちは王の寵臣ではないか?　そんなに下ばかり見てをるな。　お互ひに高貴な身分ぢや。　高尚な、大きな考へを持て。　叔父ヨオクの手に役に立つ兵力がある筈ぢや。……(一方を見て)だれぢや來たのは?

士爵スチーヴン・スクループ出る。

スク　悲しい調べの此舌が奏しまする以上の御幸福を、何とぞ有せられますやう!

王　耳も心も十分覺悟してをる。　其方の報告は、たかゞ俗世界に於ける損失

であらう。　え、此國が他人の物になつたか？　あれは予が氣苦勞の種たるに過ぎなかつたものぢや。　氣苦勞を脱したのは、損とはいへん。　ボリングブルックが予を凌がうとしてをるといふか？　どう努力しても、予以上にはなれまい。　彼れが神に仕へるなら、予もまた神に仕へるから、要するに同輩たるに過ぎん。　臣民がみんな叛いたといふか？　是非に及ばん。　彼等が予に背約したのは、同時に神に對しての誓約を破つたのぢや。　不幸、破壞、滅亡、衰廢、何となと叫べ。　最惡は死ぢやが、死は早晩來べきものぢや。

スク

御災厄の凶報を然くお覺悟あつてお受け下さいますのを喜ばしく存じます。……ちやうど時ならん暴風雨の爲に、全世界が悉く涙と溶け、常は銀色の河々がおの〳〵其岸に溢れまする如くに、涯分以上に猛り立ち、勝ち誇るボリングブルックが堅甲利兵は、最早全國に充滿して、到る處に脅威を

逞うしてをりまする。　白い髭共も謀叛して、其禿頭に兜を戴き、女聲の少年共も陛下に叛いて、持扱ひかねる鐵甲を其細い手足に纏つて、太い聲を出さうと力め、陛下のお役僧までが、二重に忌はしい櫟の弓を陛下に向つて引き絞りまする。　いや、糸を紡ぐ女共までが錆槍を引きしごいて御座所を覘ひまする。　老若擧つて反逆。　申し上げ得る以上の凶變でございます。

王

（じつと自ら制して）わるい知らせを其方はよく辯じた。　よすぎるほどによく辯じた。　ウィルトシャヤ伯はどこにをる？　バゴットは？　ブシーはどうした？　グリーンは？　彼等がをりながら、どうしてさう容易く危險な敵軍を侵入せしめたのぢや？　予が勝利を得れば、死を以て彼等を罰してくれるぞ。　きやつらは、身の平安が得たさに、ボリングブルックに降參しをつたに相違ない。

スク　なるほど兩人とも、もう身の平安を得てをります。

王　うぬ、わるものめ、毒蛇め、救ひなしの墮地獄め！　誰れにでも尾を振る犬畜生！　予が心血で溫められて育ちながら、予が心臟に針さす毒蛇！　ユダにもまさる兇惡を三倍にもした惡黨め！　一身の平安のために降伏すると　は！　地獄の惡魔軍よ、來つて彼等の邪な靈魂を嚴罰せい！

スク　（獨語的に）あゝ、深い恩愛も手の裏をかへすやうに猛烈な憎しみとなることがあるんだなア。……（王に）もし、其御呪咀をお取消しなさいまし。彼等が身の平安を得ましたのは、敵と握手した爲ではなく、敵に馘首された爲でございます。只今お呪ひになつた人達は、死の打擊を蒙つて、深い墓穴の底に横たはつてをります。

オー　ブシーもグリーンもウィルトシャヤ伯も、死んだのですか？

スク　さやう、三人ともプリストルで首を失はれました。

オー　わたしの父公爵は、兵をひきゐて、どこにゐます？

スクループがこれに答へぬうちに絶望した王が横合から口を出す。

王　どこにゐようとかまはん。（オーマールに向つて）もう決して慰めをいふな。もうたゞ墓穴や蛆蟲や墓誌の事をいはう。大地の胸の上に塵埃を紙として涙の目で悲みを書き殘さう。執行者の人選をして遺言書の事を取りきめよう。いや〳〵、それも無駄ぢや、廢黜された死骸の外には、遺すものは何にもないのぢやから！　領地も、命もみんなボリングブルックのものぢや。自分の物というては、死と其骸骨を包む上皮となる小さい土の模型ばかりぢや。もう此上は、此地上に蹞ばつて、内外の王の淺ましい死際の話をしよう。廢黜された王や戰死した王やおのが廢黜したものゝ亡靈に惱まされた王や其妻に毒殺された王や眠てゐるうちに殺された王の事を話し合

はう。　みんな殺されたんぢや。　其筈ぢや。　王の頭に戴く中空な冠の中には、あの醜惟な死の神めが主權を握つて棲んでゐて、手を振つたり齒をむきだしたりして、王の威權や榮華は、要するに、只一呼吸の間興行を許された一幕物ぢやといふことを知らんかと嘲つてゐるんぢやから。　國王となつて、畏敬され、顏で人を殺し得るとまで自惚れさせ、脆い肉體を鐵壁と思はせておいて、いざとなると、針一本で其鐵壁を突き破つて「王さん、さやうなら」と嘲りをる！　（左右に向つて）あゝ、帽をかぶつてくれ、まじめに敬禮なぞをして馬鹿にするな。　尊敬や典例や儀式や禮節は捨てゝしまへ。　おれはお前たちを見ちがへてゐたのぢや。　おれはお前たちと同じもんぢや。　麵麭で生きてゐるんぢや、空腹も感じる、悲しい事にも出逢ふ、身分が欲しい。　この通り、只の匹夫であるのに、どうしてわしを王なんぞと呼ぶのぢや？

身もだえして歎く。

カーラ　御前、賢者は、坐して徒らに不幸を浩歎することをしませいで、進んで速かに悲歎の端を絶ちます。　怖れは勇氣を挫きまする、さすれば、敵をお怖れ遊ばすは、御自身で勇氣を挫いて、敵に力をお與へになるやうなものです、こんな阿呆らしいことはございません。　恐れて而うして殺されるといたせば、進んで戰つたとて、それ以上の事はございませんぞ。　いや、戰つて死ぬのは、死を以て死を滅すのでございますが、怖れて而うして死ぬのは、死の奴隷となるのでございます。

オー　手前の父は一軍をひきゐてゐます。　彼れにお訊ねになつて、一肢を以て全體の用をなさしめる御工夫を遊ばしませ。

王　此間に王はまた漸く勇氣を回復する。（カーライルに）お前の異見は有理ぢや。……傲慢なボリングブルック、汝と雌

雄を決する爲に、一戰に及ぶから、待つてをれ。　もう臆病な癪は落ちてしまうた。　自分の物を取りかへすのはたやすいことぢや。……こら、スクループ、叔父ヨオクは、軍隊をひきゐて、どこにをる？　愉快な返辭をしてくれ、汝は不快な顏をしてをるが。

スク　其日の天候は、たれしも空の色で判斷します。　不吉な、沈鬱な事以外を申し上げかねまするのを、手前の此沈鬱な顏色でお察しを願ひまする。　なしくづしに申すのは却つてお苦め申すやうなものですから、どうせ申さねばならん事です、申し上げてしまひます。　叔父御樣のヨオク公は、ポリングブルックと御合體になりまして、北方の御城塞を悉くお引きわたしになりました。　さうして南方の武家も、悉く武裝して、敵方と相成りました。

王　（絕望して）もう澤山ぢや。……（ガーマールに）そら、どうぢや？　折角諦めて絕

望に耽つてをつたものを、えい加減の事をいひをつて！　さア、どうぢや？　どこに慰めの道がある？　此上慰め顏に口を利く奴は、永久に勘當するぞ。……フリント城へ往かう。　あそこで衰へて死なう。　不幸の奴隸となつて、王が、王となつた不幸に服從するのぢや。……兵は、みんな解散せい。　農に歸つて耕作をさせい。　そのはうがまだ、おれに從いてをるよりは、將

來がある。　此決心を變へさせようとするな。　異見は無用ぢや。

オー王　御前、今一言……

えい加減な氣休めをいうておれを騙すのは、二重におれを苦めるのぢや。

從兵共を解散しッちまへ。　闇夜となつたリチャードを去つて、旭と昇るボリングブルックに就かせるがえい。

皆入る。

第三場　ウェールス　フリント城の前

鼓手と旗手を從へて、ボリングブルック、ヨオク公、ノオサンバランドが出る。　侍者並びに兵士從ふ。

ボリ　此報道によると、ウェールス人は解散して、ソリスベリーは、最近、少數の親近者と共に此海岸へ上陸せられた王の許へ往つたと見える。

ノオ　大吉報でございます。　リチャードは、つい鼻の先きに頭を隱してゐるのですから。

ヨオク　(歎息して)王リチャードといはれたはうが、ノオサンバランド卿としては、當然であらう。　あゝ、あゝ、正系の國王ともある人が、白晝に頭を隱さねばならぬとは！

ノオ　お思ひちがひです。　手ッ取り早く申すために、尊稱を省いたまでゞす。

ヨオク　彼れに對して手ッ取り早く申されたら、彼れがあんたを手ッ取り早く取扱つて、頭字を省いた報いに、あんたの頭そッくりを切縮めかねなかつた時代もあつた。

ボリ　ねえ、叔父上、あんまりわるくお取りにならんはうがいゝ。

ヨオク　ねえ、甥どの、あんたもあんまり取らんはうがいゝ、天が上から見ておいでだから、取るべき物以外の物は。

ボリ　そりや心得てます、決して天意に戻らうとは思ひません。……だれか來た。……

パーシー出る。

パーシ　おゝ、ようこそ。　どうだ城は、降りさうにないかね？

ボリ　王方の防禦が行きとどき切つてゐます、容易に御入城は出來ますまい。

パーシ　王方？　だつて、王はゐないぢやないか？

ボリ　いゝえ、王リチャードはあの城壁の中にをられ、其傍にはオーマール卿、ソリスベリー卿、士爵スチーヴン・スクループがをり、尚その外に、名は聞き漏しましたが一高僧がをります。

ノオ　おゝ、多分カーライルの監督だらう。

ボリ　諸卿、……あの古城の外壁（肋骨）に近づき、喇叭を吹き鳴らして（其老衰の耳へ）休戰を告げ、かういふ風に言ひ入れて下さい。……ヘンリー・ボリングブルック、こゝに恭しく跪き、リチャード王の御手に接吻し、謹んで陛下に忠誠を誓ひ奉る、若し追放の御宣告を取消され、お取りあげになつたる所領を、無條件にて、再び元の如くに下附せらるゝに於ては、速かに干戈を御脚下に抛ち申すべく參上仕つた。　併しながら、若し御許容なきに於ては、是非に及ばざる次第なれば、兵力を利用し、殺傷したるイギリス人の創口より降る血の雨を以て盛夏の塵埃を鎮めまする所存でござる。　なれどもさやうな韓紅ゐの暴雨などを以てリチャード王の美麗なる御領地の若緑りの野面を染めんことは、ボリングブルックの飽迄も望まざる所であることを、膝行頓首して、臣たるの禮を盡して、證明いたしたく存じをるといひ入れて下さい。　其間、自分は此絨氈のやうな緑の野をあちこちと行軍し

てゐよう。……

ノオサンバランド と 外數人の 者城の 方へ 進み行く。

（殘つてゐる者共に）軍鼓をおそろしげに鳴らすことはせんで、あちこちと練りあるかう、わが軍が如何に整々堂々としたものかを、あの 古城塞から十分に看取せしめるため。 按ふに、自分と王とがいよ〳〵戰ふことゝなれば、水と火が相激して、電霆が黑雲を決裂するあの物すごさにも勝るであらうが、火をわざと彼れに讓つて、自分は柔順な水となり、彼れが荒れる間に、雨をふらさう。 しかも地上にばかりふらせて、彼れに迷惑をかけんやうにしよう。…… 進軍して王の樣子を見よう。

此時、城外にて談判開始の喇叭を吹き鳴らす。 と城内でそれに應へる。 つゞいてフラリッシュ式の喇叭を盛奏する。 と城壁の上へリチャード、カーライルの監督、オーマール、スクループ 竝び

にソリスベリーが出る。 パーシーは、早くもそれを見附けて （通例は次ぎの白をポリングブルックの語とする）。

パーシ あれ、あれ、王リチャードが自身で出られた。 恰も太陽が火と燃ゆる東門から、將に西方へ進まんとしたる時に、邪雲が行く手に横はつて、其輝く光りをくらまし、其進路を汚さんとするのを見て、腹を立てて眞赤になつたやうに。

ヨオク さすがに國王らしい顏ばせ。 あれ、あの鷲のやうな目の光りには、人君たるの威嚴がある。 あゝ〳〵、情けないことだ、あゝいふ立派な顏が汚され害はれることになるやうでは！

双方しばらく無言。 と王は耐へかねた思入れで、きつとノオサンバランドを睨んで、口を開く。

王 呆れ果てた振舞ひぢや！ 予は飽迄も正系の君主であると信ずる、である

から其方はすぐさま恐懼して跪くであらうと、かく只今まで待つてをつたに。　予が其方の君主であるなら、なぜ予が面前にゐながら、其膝に畏敬の任務を果さしめることを忘れてをるのぢや？　若しまた予を君主でないといふなら、いつ神が其御代理たるの職權を予からお取り上げになつたかを示せ。　人間の手を以てしては、此神聖な職梃を、決して奪ひ去ることは出來ん、冒瀆するか、窃盗するか、簒奪するかせん以上は。　其方は、其方自身がしたやうに、みんなが其靈魂を引きちぎつて、見事、謀叛を爲果せ、予を孤立ならしめたと思ひ込んでをるであらうが、焉んぞ知らん、全能の神明が、予の爲に、惡疫の大軍をあの雲中にお召しつどへになつてをる、今に見い、臣下の身を以て其主たる予に手を振りあげ、予の榮譽を辱めんとした汝らは、汝らのまだ生れん子々孫々までが、御懲罰の惡疫に擊たれをらうぞ。……あれにをるのはボリングブルックであらう。　彼れに然ういへ、此國に一

歩たりとも足を蹈み込むのは、大逆罪であると。　彼れは戰爭の碧血を以て遺産權を買はうとしてやつて來たのぢや。　さうして平和に王冠が享樂し得られると思うてをるらしいが、さうなるまでには、此イギリスの母の子を幾萬人となく犧牲となし、彼れらの血を以て長閑なるイギリスの處女の如き柔和の面を韓紅ゐの怒りに染め、行く先き〳〵の牧場を忠良の民の血で汚さねばなるまいぞと、然ういへ。

ノオ

（天を仰いで）天の君よ、かりにもわが君が、內亂のために、さやうな不幸に逢はれまするやうなことのございませんやうに！……正義を重んぜられまする御從弟ハーリー・ボリングブルック公に於ては、あくまでも陛下を尊敬をられまする、而うして御祖父王の御墓によつて、御同族たることによつて、すなはち同じ尊貴なる源泉より流れいでさせられた御血統たることによつて、勇敢なる故ガント公の御手によつて、まつた苟も誓言し得らるべ

き限りの一切を含む彼れ自身の名譽と德とによつて、誓はれまする、彼れの此たびの歸國は、ひとへに其正系の王族たることの御承認を得て、世襲の全權利を回復せしめられたく、それを悃願し奉らん爲に外ならぬのでございます。　隨つて若し陛下に於かせられて、右御許容下されますれば、彼れは速かに燦く劒戟を錆に委ね、武裝したる馬共を厩に退け、全心を傾けて陛下に忠勤を勵むべく、王統たるに恥ぢざる正義の名士として誓はれまする。　而うして、以上は、武士たる手前の信じて疑はざる所でございます。

王　ノオサンバランド、王は斯やうに答へたと傳へい。　王は其從弟公爵を歡んで迎へる、又其當然なる要求は、異議なく悉く許容して實施に及ぶと。此好意の挨拶を彼れがまた好意を以て受け入れるやう、其方能ふ限りの耳に快い言葉で傳へてくれ。

これにてノオサンバランドはボリングブルックらの控へてゐる處へ戻つて行き、次ぎの問答の間に、彼れに王の返辭を傳へることよろしくある。

オー　（オーマールに）從弟よ、これほどに讓歩して、何もかも向うのいふ通りにするのは、恥辱ぢやなからうか？　ノオサンバランドを呼び返して、逆賊めに挑戰して、討死をしたはうがよいであらうか？

王　いや〳〵、かういふ風になされて、當然でございます。　時機が熟して、お身方の兵力が加はりますまでは、只穩かに應對遊ばすがよろしうございます。

オー　おゝ神！　おゝ神！　あの傲慢な男に、嚴然として追放をいひわたした此舌が、世辭をいつて、前言を取消さねばならんとは！　おゝ、此悲みの大きいほどに大きな人間になりたい！　でなければやおれの名を小さくしたい！

でなけりや過去を忘れるか、現在を記憶せずにゐたい！……えゝ、傲慢な心め、なぜさう波を打つ？　が、打ちたければ、勝手に打て、今に敵が來ておれをも汝をも勝手に打ちのめすであらうから。

此うちにノオサンバランドがボリングブルックの處から、又王のはうへ來る。

オー王　ノオサンバランドがボリングブルックの許から歸つて參ります。

さ、王は如何したらよいのぢや？　服從せねばならんか？　よろしい。服從しよう。廢位されるのか？　諦めよう。王の名を失はんけりやならんか？　よろしい、捨てよう。あの大切な寶石をも一連の珠數に代へよう。あの輪奐たる宮殿をも隱者小屋に、あの莊麗な王服をも施與れ共の破れ上被に、あの精巧な盃をも木彫の小皿に、此王梃をば回國者の突く杖に、數萬の臣下を木で刻んだ聖者の像の一對に、わが大王國をば小さい墓に、小さい〳〵墓に代へよう。でなくばどこかの大通りに、所謂お成り路に埋められよう、さうしたら臣民どもが始終のやうに、其君主の頭を蹈みつけをるであらう。生きてをる時にすら、おれの心臓を蹈みにじる奴等ぢや。死んで埋められたとなれば、頭を蹈みつけんでおくものか！……

此間オーマールは耐へかねて泣いてゐる。

オーマール、あゝ、お前は泣いてくれるか！　なア、敵のさげすむ二人の涙で、全國の天氣を惡うしてくれよう。此溜息の風と此涙の雨とで、夏の收獲をめちや〳〵にして、此謀叛した國を飢饉にしてくれよう。でなけりや此不仕合せを玩弄にして、落ちる涙を或おもしろい事に使ふことにしよう。例へば、同じ處にばかり落すことにして、地上に自然と墓穴が掘れるやうにしたら、どうであらう？　さうしてそこへ葬らせて……「こゝに涙を以ておのが墓を掘りし二人の近親者眠る」と書かせる。え、そんな馬鹿な

ことがこちとらに相應ではないか？　あゝ〳〵、つまらん馬鹿なことばかり。（一同を見返つて）お前たちは笑ふであらう。

一同頭を垂れて泣いてゐる。此うちにノオサンバランドが近づく。王は之を迎へて

王　（皮肉な絶望の調子で、馬鹿叮嚀に）強大なるノオサンバランド卿、王ボリングブルックは何と申されました？　彼れ陛下はリチャードに、死ぬまでの生命を許可せられましたか？……

ノオサンバランド　恭しく會釋する。

ノオ　おゝ、辭儀をなさるの。　ぢや、諾といはれたか？

王　彼れは下の郭に於て、御會見を乞はれますが、お下り下されませうか？

ノオ　なに、下へ下れ？　なるほど、わしは、あの輝くフィートンと同樣に、悍馬を御しかねて、天から下界へ落ち下るのぢや。下の郭でといふか？　謀叛人に呼び出されて、下へ下るのは、王には恥辱ぢやが、彼等には名譽ぢや。あゝ、下へ下れ！　朝權も下れ！　王威も下れ！　夜鳴く梟の聲が聞える、雲雀が舞うて囀るべき時刻ぢやのに。

王并びに其侍臣は城壁からおりて奥へ入る。

ノオサンバランドは又ボリングブルックの處へ戻つて行く。ボリングブルックは之を迎へて

ボリ　陛下は何といはれました？

ノオ　愁傷の餘りに、たはいもない事を申されます、まるで狂人のやうに。　あ、もう見えました。

王リチャード侍臣と共に下（平舞臺へ出る。

ボリ　（其左右の者に）みんなずつと退つて……陛下に敬禮をなさい。……

王の前に跪いて

陛下……

（遮つて）從弟よ、賤しい土に其高貴な膝を接吻させて誇りを覺えさせるのは、あんたの身分を辱めるものです。わたしは虛禮を以て迎へられることを好まん、寧ろあんたの眞心に接見したい。お起ちなさい、お起ちなさい。あんたの本當の心は（と頭へ手をやつて）此邊にあるであらう、膝は低うなつてをつても。

ボリ　陛下、自分が今度參りましたのは、ひとへに自分の物だけを得んが爲でございます。

王　あんたの物はあんたの物です。わたしもあんたの物であるし、其外何もかも。

ボリ　あゝ、陛下、若し手前の忠勤が御嘉納に適しますなら、陛下は手前の御主君でございますから、手前の物です。

王　適しますとも。物を手に入れる强い、慥かな法を心得てをる人達は、勿論、其物を得るに適する。……（ヨオクこらへかねて泣く。）いや、お泣きなさるな。涙は愛情のしるしぢやが、涙を止める役には立たん。……（ボリングブルックに）從弟よ、わたしはあんたの父としては若過ぎる、けれどもあんたは後繼となつてもよい年頃ぢや。あなたの欲しいといふ物は、あげます、甘んじてあげます。力を以て臨まれゝば否とはいへんか

ら。　え、これからロンドンへ往くのですか？

ボリ　はい、さやうでございます。

王　ぢや、いゝえとはいはれん。

喇叭鳴る。皆入る。

第四場　ラングレー　ヨオク公の庭園内

妃イサベラと二人の官女出る。

妃　此庭で何か遊びをして、此物憂さをまぎらしたい。何か面白いことを工夫しておくれ。

官女　御前、球投げをいたしませう。

妃　いや〳〵、それは此世の中に障礙の多いことやわたしの運命が當然の傾向とは、まるで逆さまぢやといふことを、思ひ出させるばかりであらう。

官　では、ダンスをいたしませう。

妃　心が悲みのために調子はづれになつてゐるのに、どうして足が踊の調子に合ひませう？　ダンスはいけないよ。何か外の遊びを。

官　では、お話をいたしませう。

妃　悲しい話？　樂しい話？

官　どちらでもいたします。

妃　どちらもいけないよ。……樂しい事は、今は全く缺けてゐますから、生中そんな話を聞くと、なほと悲しさが思ひ出される、かといつて、悲しい話は有り餘つてゐますから、此上、足らぬ樂しさに悲しさを附け加へて、同じ事を

官　繰返すにも及ぶまい。　幾ら歎いたとて無いものは無いものです。

妃　では、歌ひませうか？

官　歌へるなら結構です。　けれども泣いておくれだつたら、そのはうがわたしに取つては嬉しいでせう。

妃　泣いてお役に立ちますなら、泣きませうとも。

官　さア、泣いて役に立つものなら、わたしは歌ひもしませう、お前の涙を借りるまでもありません。……

此時、庭師と其下職二人が出る。

ま、ちよいと、庭師どもが來たから。　ちつとの間あの木かげへ入つてゐませう。　大丈夫（針一組に此不幸な身を賭けてもよい）あの者共は政治向きの話をしませう。　國變が起りかけると、たれしも其噂ばかり。　いやな事の前には、いやな事が聞えるもの。

妃と官女二人は一隅へ退く。

庭師　おめえはあのぶら下つてゐる杏の枝を縛りあげてくんな、まるで厄介息子共が親父を困らせるやうに、おッそろしくおッかぶさりやアがつて、あれぢや幹がたまらねえや。　枝へ突ッかひでもしなよ。……（又一人に）おめえは、延び過ぎて、いやに高くなつてる枝をちよんぎつてくんな、死刑がゝりのお役人が罪人の首をやッつけるやうに。　こちとらのお政治も平等主義だ。　傍との釣合ひが取れねえぢや困らア。　おめえたちがそれをやつてる間に、おれはいけねえ草を拔かう。　こいつがはびこると、いゝ花が痩せッちまはア。

下職　だつて、こんな狹ッくるしい、塀で圍つた庭ン中で、法だの、式だの、釣合ひだのと、やかましい事をいつて、立派なお政治の眞似事なんかしたつて、つまらないぢやないかね、肝腎の海で圍つたお庭の此イギリスせへ雜草だら

けだのに？　一等綺麗なお國の花は息の根をとめられる、果物の木の手入れはとゞかず、生垣はこはれ放題、花壇はめちや〳〵、大事の草も木も毛蟲だらけだのに。

庭　（制して）しッ！　しッ！　手入れを怠つて、こんなだらしのない春を迎へなすつた其お方は、今はもう葉の落ちる秋を見てござる。　其の大きな葉の下で雨風を凌いでゐた雑草めらは、其かたの肥料にでもなりさうな面アして、其實は其かたを食ひ物にしてゐやがつたのだが、みんなボリングブルックさんに根こじにされたアな。　といふのは、ウィルトシャヤやブシーやグリーンなんていふ人のこつた。

下職　え、あの人たちア死んだかい？

庭師　うん、死んだ。　さうしてボリングブルックさんが、あの浪費者の王さまを取ッつかまへてしまつた。　あゝ、お氣の毒なこつた、こちとらが庭の手入れをするやうに、早くお國をどうかしておかつしやればよかつたのに！　こちとらは、時おくれにならんうちに、果物の木の皮にやわざッと傷を附ける、あんまり肥料がきゝすぎると、滋液が勝つて、馬鹿に延びて、早く枯れる。　王さまも、成り上りの人達をさういふ風に取扱はしやつたら、相應な忠義の實が生るまでの壽命もあつたらうし、王さまもそれを召しあがることが出來たらうに。　餘計な枝をこちとらはちよん切ッちまふ、實の成る枝を生かすためだ。　王さまもさういふ風になすつたら、お冠を取られさつしやるやうなことはなかつたらうに、つまらんことに浮かれてござつたのが間違ひのもとだ。

下職　え、ぢやア何かい、王さまはお位を取られッちまひなさるだらうか？

庭師　もう參ッちまつてゐなさるんだ。　お位ちあぶねえもんだ。　ゆうべョオクの公爵さまの御信友といふ方のとこへ情けない知らせが來たさうだ。

妃

以上の問答を樹蔭で聞いてゐた妃は、此時こらへかねて

おゝ、物をいはないでゐると、胸がせまつて、死にさうな氣がする。（前へ進んで）これ、アダムの面影を傳へて、此庭の手入れをしてゐる男よ、どうしてそんな不快な噂を、無遠慮に、つけ〳〵と口外するのぢや？ どこのイヴに、どんな毒蛇に教唆されて、人間に二度の大墮落をさせようとするのぢや？ どうしてリチャ

ード王が位をお取られなされたなどといひます？ おのしなぞに、土くれ同然のおのしに、國王の御零落が豫言される筈がない。 やい、いつ、どこで、どうしてそんな不吉な噂を聞きました？ やい、いへるなら言つて見い。

庭師

（平伏して）どうぞ御勘辨下さいませ。……こんなお知らせは決して申し上げたくはないのでございますが、全くの事なのでございます。 リチャード王さまはボリングブルックさんに、すつかり捕つておしまひになりました。お二人の御運は、今權衡に掛かつてゐるんだとしますと、王さまの皿にや、御自身と薄ッぺらな、皿が尙と輕くなるやうな嬖臣達が乘ッかつてゐなさるきりだが、ボリングブルックさんの方にや、御自身の外にイギリスのお大名がたが殘らず乘ッかつてゐますから、てんで片重りがしてゐます、王さまは叶ひッこはありません。 ロンドンへお急ぎでいらしッてごらんにな

りやわかります。　手前は只、みんなが知り切つてゐることを申し上げたばかりでございます。

妃　（歎息して）足の早い凶報よ、どうして一ち後にわたしの處へは來たぞ、わたしにこそ眞先に知らせてくれべき筈ぢやのに？　あゝ、一ち後に知らせたのは、其知らせの悲しさの總じまひをわたしにさせようとするのか！……：さ、さ、ロンドンへ往きませう、不仕合せなロンドンの大君に會ふために。　まア！　わたしは、勝ち誇るボリングブルックを、淺ま　い泣顔をして迎へるために、生れて來たのか？……やい、庭師、こんな不吉な事を知らせをつた罰で、そちが接ぐ庭木は、決して決して育つまいぞ。

庭　妃と官女入る。

お氣の毒なお妃さま！　手前の職業は幾らでもお呪ひなさいまし、どうかまア此上お不仕合せであらつしやらんやうに！……　こゝいらへ涙をお落しなすつた。こゝへ苦いお惠み草（ゲレース）の花壇をこさへよう。　悲み草といふ呼び名の此花がこゝで咲きや、お妃さまの御愁傷の好いお記念だ。それがお氣の毒に思ふおれの微志だ。

入る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第四幕

第一場　ウェストミンスター院の大會堂

僧籍の貴族は王座の右、俗籍の貴族は左、平民は下。
公ボリングブルック國會に臨場する體にて出る。オーマール、ノオサンバランド、パーシー、フィッチャター、サーリー、カーライルの監督、ウェストミンスターの院長並びに侍者らつゞく。と他の一貴族、傳令使、吏員がバゴットを引ッ立てゝ出る。

ボリ　（席に着いて）バゴットを呼び出せ。……

吏員がバゴットを欄際へ進ませる。

さア、バゴット、グロースターの死に關して存じてをる限りを有りのまゝに申せ、王に勸めて之を行はしめた者は誰れであるか、又實際殘虐の手を下して、彼れを非業に終らしめたものは誰れであるかを。

バゴ　では、オーマール卿にお會はせ下さい。

ボリ　從弟よ、前へ進んで、あの男を御覽。

オーマール前へ出る。

バゴ　（オーマールに）オーマール卿、勇敢なあなたの事だ、よもや一度公言されたことを、卑怯に、言はんとはおつしやるまい。グロースターの暗殺の計畫されたあの深夜に、あなたが言はれた「自分の腕は長いから、靜かな此イギリスの朝廷から、あのカレーの叔父（グロースター）の頸まで達きさうなものだ」と。其時、なほいろ〳〵話があつたが、私はあなたが「ボリングブルックを

歸國させるくらゐなら、一萬兩の提供も排斥する」と言はれたのを慥かに聞いた。それから「あの從弟が死ねば此國の非常な幸福だ」とも言はれた。

オー　（列座に向つて）王族がた、貴族がた、自分は此下賤者に對して何と答へませう？　同位置に立つて彼れを譴責しますれば、自分の美なる血統を汚すことになるのです。けれどもさうしなければ、彼れが讒誣の舌によつて自分の名譽は汚されなければなりません。……さ（とガーマールに向ひ、床上に手袋を投げて）これが自分の質だ。其方を地獄に赴かせる令狀の手捺印だ。其方の申し立ての虚僞であることを此劍によつて證明しよう、其方の卑しい心血は、わが此貴重なる劍を汚すには堪へんのであるが。

ボリ　バゴットはすぐに手袋を拾はうとする。

オー　（それを制して）バゴット、ひかへい。それを取上げてはならん。

（ボリングブルックを尻目にかけて獨語のやうに）あゝ、彼れが此列席中で一等身分の

高い者であつて、……一人だけは別として、……さうしておれを憤激させたのであれば、最も望む所なのだが。

これを聞くと、フィツヂーターが氣色ばんで前へ出る。

フィツ　身分が同等でなけりや勇氣が出せんといはれるなら、さ、オーマール、これが質だ、自分が敵手にならう。そこにゐるおぬしの姿を照らし出す大日輪を誓ひにかけて、自分はおぬしが誘らしげにグロースターの下手人だと公言したのを慥かに聞いた。若しそれを二十回も否といふなら、おぬしは虚言者だ。自分は其虚言を其製造元のおぬしの心の臓目がけて、此細刀の尖頭で突き戻してくれる。

オー　卑怯者が、そんな目の目を見るまで、どうして汝が生きてゐるものか？

フィツ　（いよ／＼激して）うぬ、今すぐに勝負がしたいわい！

オー　（睨み返して）フィツヲーター、汝は此罰で地獄へ墮ちるぞ。

これを聞いて、血氣のパーシーがこらへかねた體で、前へ進んで

パー　いゝや、オーマール、そりや虚だ。フィッヲーターどのゝ彈劾はみんな正しいが、汝のいふ事はみんな不正だ。それを其息の根を止めてまでも證明するために、さ、質を投げる。（と手袋を投げて）勇氣があるなら、それを取れ。

オー　（せゝら笑つて）それを取らんやうなら、此手首は腐り落ちろ、きらめく敵の兜の上に、二度と復讐の槍を揮ふことも出來なくなッちまへ！

いひも終らぬうちに又一貴族がつか〳〵と前へ出る。

貴族　やい、僞り誓ふオーマール、同じやうに地上に課するぞ。汝を、日出から日沒まで叫びつゞけても尙足らん程の虚言者、僞り者と罵つて、怒らせて、勝負させる。　さ（と手袋を投げて）これが自分の名譽の質だ。勇氣があるなら、それを取つて、勝負せい。

オー　（いよ〳〵猛つて）もう外に敵手はないか？　誓文！　殘らず敵手にする。汝ら如きが一萬人束になつて來ても、此胸には千に餘る勇魂が宿つてゐる、見事、敵手になつてくれる。

サリー　（フィッヲーターに）フィッヲーター卿、わたしはオーマールとあなたが會談ですつてゐた時の事を、よく記えてゐますよ。

フィッ　あゝ、なるほど。　あの時、あなたは同席でしたねえ。　ぢや、わたしが正しいといふことの證人になれるわけだ。

サリー　正しいどころか、天に誓つて、君のいふことは大きな僞りだ。

フィッ　（憤激して）サリー、汝こそ大うそつきだ。

サリー　此恥知らずが！　其一言が此劍に重みを加へる、汝を膺懲せにやおかん、報復せにやおかんぞ。　今に見ろ、虚言者たる汝をも、其虚言をも、汝が父の遺骨と共に、土中に深く埋めてくれる。　其證明のための質は是れだ。

（と手袋を投げて）さ、それを取つて勝負をしろ、敢てする勇氣があるなら。

フィツ　ヘッ！　我武者羅馬を盲滅法に走らせたものだ！　敢て食ひ、敢て飲み、敢て呼吸し、敢て生きてゐる限り、如何な荒野原へでも出張して、敢てサリーと會見して、其面上に唾吐きかけて、嘘つき、大嘘つきと罵つてくれる。（と手袋を投げて）これが約束だ、膺懲を終るまでの鎖だ。……自分は此新王國の民たらんとするが故に、斷言する、オーマールには今言つた通りの罪科がある。　のみならず、追放されたノオフォークに聞く所によれば、（とオーマールに）汝は老公をカレーで殺すために部下二人を派遣したといふことだ。

オー　（列座の方に向つて）どなたか高僧がたのうちで、質をお貸し下さるまいか？　自分はそれを以てノオフォークの虚言を證明いたしたい。

僧籍貴族のうちで、其帽を貸す者が出る。オーマールはそれを受け取りて

これをこゝに投じますぞ（と帽を地上に投げて）若し彼れか歸國を許されたら、勝負して正邪をたゞすために。

ボリ　（一同に對して）これらの爭議は、ノオフォークの歸國するまで、すべて質と共に保留しておく。　彼れは、自分の仇敵ではあるが、呼び戻して其所領一切を返し與へ、オーマールと立合はせることにしよう。

カーラ　（遮つて）いや、其名譽ある日は見られますまい。　ノオフォークは、追放中、しば〳〵キリストのお爲に、十字の旗を翻して邪教徒、トルコ、サラセンを征討し、赫々たる戰功を顯しましたが、其疲勞のため、イタリーのヴニスに退き、あのうるはしい國土で命を終り、其清い靈魂を、多年旗下に屬して御奉仕の戰ひをいたしたる御大將キリストの御手に獻げました。

ボリ　え、監督、ノオフォークは亡くなりましたか？

カーラ　正に亡くなりました。

ボリ　あゝ、彼れの靈魂よ、安らかにエブラハムどのの御胸に！……爭訟者の諸卿よ、此爭議は質と共に保留しておく、立合ひの日を定めて申し渡すまで。

（此時、ヨオクが侍者らを從へて出る。）

ヨオク　ランカスターの公爵閣下、自分は翼を失ひたるリチャードの使者として參上しました。リチャードは甘んじて閣下を王嗣と定め、すなはち王權の證徵たる寶（イヤ）挺を閣下にお手渡しいたします。彼れより降つたる其王座にお就き下さい。

ボリ　然らば、神の御名に於て、王座に登りませう。

（いひも終らぬうちに）

カーラ　めつさうな、神よ禁じたまへ！（と起ちあがつて）自分は此尊貴なる席上に於て、口を開くべく最も不適任な者でもありませうが、眞實を語るべく、職分上、最もふさはしき者と信じまする。あゝ、若し神が、此立派なる列座中

に、至尊リチャード王を正しく裁き奉るに足る只一人の立派なる人を在らしめられましたならば、おゝ、其立派なる德性が、王を裁く如き不法を彼れをして憚らしむべきであります。臣たる者がどうして君に宣告が下されます？　而してこゝにをる者で王の臣下ならぬ者がございますか？　盜賊と雖も其席に居合はさずして裁判を申し渡さるゝ例はござらん、たとひ其罪が明かであつても。然るに神の御代理、御將帥、御執事として聖油を塗られ、冠をいたゞき、既に多年就任せられたる國王を、身分ひくき臣たる者が、其不在中に、あふけなくも宣告を口にすべきでござりませうか？　おゝ、神よ、キリストの敎へを奉ずる公明正大の民たる者が、さやうな忌々しい、汚らはしい振舞をいたすことをお禁め下さい！　臣民たる手前が、神慮を頭にいたゞき、王のおん爲に大膽に公言します。あれにをらるゝハーフォード卿を諸君は王と呼ばれますが、卿は其王に叛いた傲慢な叛逆者であ

ります。若し彼れを王位に卽かしめらるゝやうなら、手前は豫言します、イギリス人の碧血が全土の肥料となつて、未來の各時代は此大惡業の爲に呻き苦しみ、平和は去つてトルコ其他の邪教徒の手に眠り、平和なるべき此國には內爭相次ぎ、骨肉相食み、同血相滅し、到る處擾亂、恐怖、暴動の巷となり、國土はゴルゴサの野、髑髏の原と呼ばるゝに至りませうぞ。おゝ、此一門を煽動して他の一門と爭はしめられるのは、呪はれた此地上にても前例のない最も悲しむべき大確執のもとゐでありませうぞ。そんな事があつてはならん。おとめなさい。お禁じなさい。然らざれば、子々孫々までが諸君を怨み呪ひませうぞ。

ノオ　（嚴然として）立派にお陳べなされた。其お骨折の報いに、あなたを大逆罪として捕縛します。……ウエストミンスターの院長どの、審問の當日まで、きつとおあづかり下さい。……（一同に向つて）諸君、平民の請願をお許しにな

りますか？

ボリ　（ヨオクに）リチャードどのをつれて來て下さい。衆人の前で降服されることゝすれば、嫌疑を避けることが出來る。

ヨオク　案內して參りませう。

ヨオク入る。

ボリ　こゝに拘留されてをる諸卿よ、君たちは、改めて答辯のため召喚さるゝまで、保釋の證人を求めるがよい。自分は君たちの友情に負ふ所もなかつたれば、助力を豫期したこともなかつた。

ヨオクがリチャード王を案內して出る。つゞいて吏員が王宮の寶器（王冠、王樞等）を携へて出る。

王　あゝ、何といふあさましいことぢや、まだ王として君臨してゐた心持を脫ぎ捨てもようせんうちに、王の前へ呼び出されるとは！　わしはまだ殆ど